

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

旭

豊橋校区史

9

Asahi







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 旭



色紙（あけぼの） 【花井每恵 画】

わが



市電通り (前畑←坂上)



旭小学校



平成13年7月4日撮影



市電通り (東田坂上電停)



三八市

旭町



国道1号 (東新町)



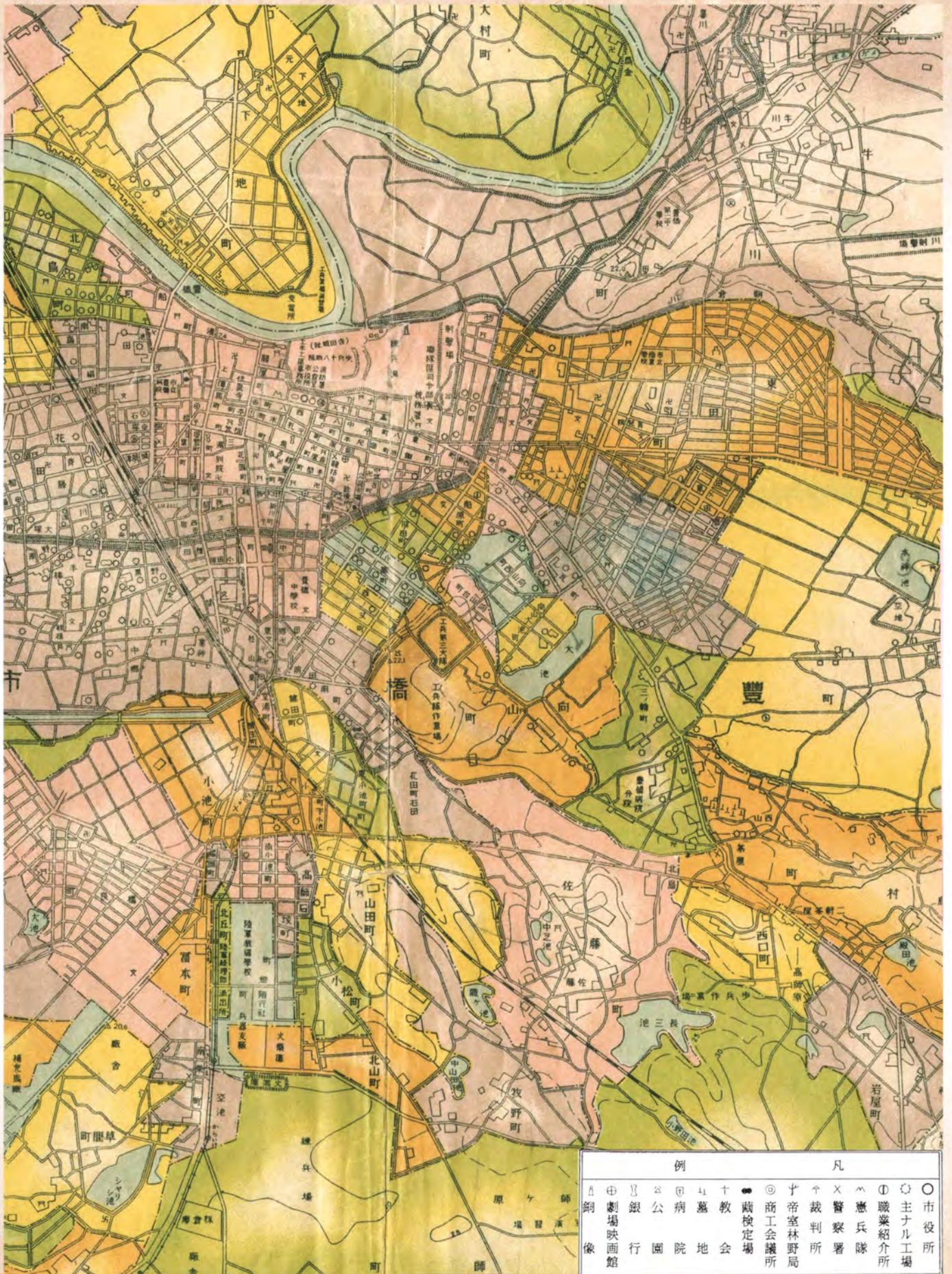
さくらピア (豊障会館)



陸軍墓地



桜ヶ丘公園



この地図は昭和初期小学校4年生の郷土学習に使用した『豊橋郷土誌』の昭和10年版付図の一部分を拡大したもの

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
旭校区総代会長

溝 口 和 政

世界の国々で大きな移り変わりを度重ねる近代、市制施行の明治のその日は百年もの遠い昔のことです。以来、糸の街・軍都と呼ばれて近隣の人々に、それはそれは親しみ馴染まれ賑わい栄えた豊橋でした。当時の私たちは“花も蕾の若桜五尺の命ひっさげて国の大事に殉ずるは我ら学徒の本分ぞ嗚呼紅の血は燃ゆる”100祭記念映画『早咲きの花』そのもので、竹馬の友の幾人かが草葉の陰の露と消えました。在りし日の残像を回想しながら、教養高く慎み深い、人情味溢れる地域の皆様と今日ここに在る幸を感謝しています。

古今東西に諸流通の息吹きを醸す国1の大動脈と湖の幸も豊かな隣県交誼の源である大知波線。その珍しい急坂をせっせと行き交う市内電車。近代技術の粋を結集した総合福祉センター「あいトピア」等の一連が、我が校区のシンボルとなっています。又、これら文化文明の淵源である旭小学校も、平成13年には創立50周年の指をおりました。

後世にとりどりの足跡を印しての今、市制施行の100周年を迎え記念校区史発刊と夏祭り納涼大会の記念事業が大入りの大盛況となりましたことは、熱意溢れる皆様のお力添えのお陰様と深く感謝致しますと共に厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

目次

CONTENTS

第1章 自然と環境

- 1 位置 7
- 2 地質・地形 7
- 3 気象 7
- 4 土地利用 7
- 5 人口 8
- 6 公共交通機関 8
- 7 公園と緑 8

第2章 歴史と生活

- 1 地域の歴史 10
 - (1) 原始(石器・縄文・弥生・古墳時代) ... 10
 - (2) 古代(奈良・平安時代) 11
 - (3) 中世(鎌倉・室町・安土桃山時代) ... 12
 - (4) 近世(江戸時代) 14
 - (5) 近代(明治・大正時代) 18
 - (昭和初期～戦後) 26
- 2 校区の活動 28
 - (1) 体育活動 28
 - (2) 市民館活動 28
 - (3) 納涼まつり 29
 - (4) 交通安全運動 29
 - (5) 青少年健全育成活動 29
 - (6) 防犯活動 29
 - (7) 防災訓練活動 29
 - (8) 530運動 29
 - (9) 敬老会・成人式 30
 - (10) 平成18年度旭校区総代会事業計画 ... 30

第3章 教育と文化

- 1 学校教育 31
 - (1) 東田尋常小学校・東田国民学校 31
 - (2) 豊橋市立旭小学校 33
 - (3) 藤ノ花女子高等学校 34
- 2 幼児教育 35
 - (1) 豊橋ひまわり保育園 35

- (2) 愛児舎 36
- (3) 不動院幼稚園 36
- (4) 恵日幼稚園 37
- (5) 昭和保育園 37
- 3 神社・寺院 37
 - (1) 東田神明宮 37
 - (2) 瓦町神明社 38
 - (3) 豊城神社 39
 - (4) 桜下稻荷社 40
 - (5) 道知辺稻荷社 40
 - (6) 吉田の秋葉信仰 41
 - (7) 竹隣山・本門寺 43
 - (8) 正覚山・願成寺 43
 - (9) 聖休山任養寺・不動院 44
 - (10) 万年山・臨濟寺 45
 - (11) 太子山勝鬘寺・太蓮寺 45
 - (12) 陸軍墓地 46
- 4 人物・民話・昔話 46
 - (1) 武田賢治 46
 - (2) 今西卓 47
 - (3) 伊藤卯一 47
- 思い出話 二題 48
- 伝説 仏どろぼう・瓦町の梅屋敷物語 49
 - お弓橋 50
- 参考文献・編集後記 51

校区の位置



第1章 自然と環境

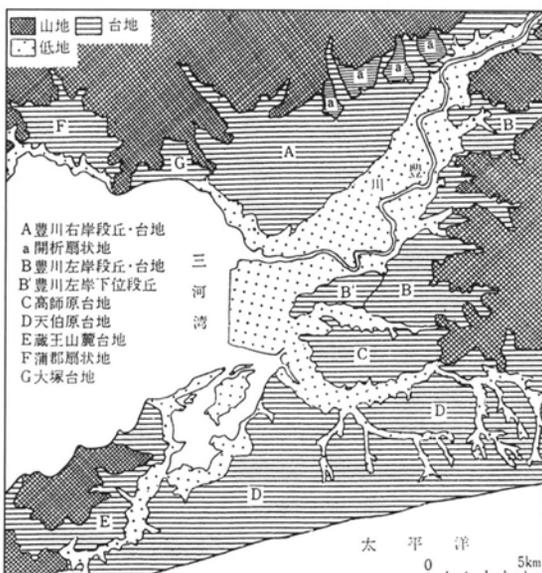
1 位置

豊橋市は愛知県の東部にあり、東は弓張山系を挟んで静岡県に接し、南は黒潮の流れる太平洋、西は穏やかな内海三河湾に面している。また、北側と東側には緑深い山々が連なり、北縁に沿って奥三河に源を発する豊川の清流が見られる。

当旭校区は、この豊橋市のほぼ中央部の北側に位置しており、全12町内で構成され、全域が市街化区域になっている。

2 地質・地形

主な地質は礫質の洪積層^(注1)が市街地の大部分を占めており、台地や丘陵地を構成していることから、地震や液状化現象には比較的



豊川下流地域の地形区分（建設省『愛知県東三河地区の基盤』により作成の青野寿郎・尾留川正平編『日本地誌』12愛知県・岐阜県による）

強い地層と思われる。標高は、東田坂上の信号交差点付近で約18m、旭小学校付近で約9.6mあり、三八通り^{さんぱち}を挟んで相当な差がある。豊川左岸段丘の標高10m以下の中位段丘とそれ以上の高位段丘に属している。

注1：主に古豊川の礫や砂の堆積物でできた台地

3 気象

南に太平洋の暖流（黒潮）が流れており、東と北に山地があって、比較的温暖な気候に恵まれている。年間の降水量は約2,000mm、平均気温は約16℃、気温の年較差（月平均気温の差）は約22.1℃位で、快適な気象条件といえる。卓越風（ある期間一定方向に多く吹く風）は北西の風で冬に多く現れる（三河の空っ風）。夏は南よりの風であまり強くない。即ち冬は山越えの乾燥した北西風が強く吹き、逆に夏は海からの湿った弱い風で雨が多くなっている。

4 土地利用

旭校区の全面積は61.31ha（市全域26,136ha）

- ・自然的利用…畑地0.14ha 水面地0.33ha
- ・都市的利用…住宅地32.04ha 道路地12.98ha
公益地5.52ha 商業地4.56ha

・幹線道路

- ①校区の南側を一般国道1号
- ②北側を東西に主要地方道豊橋大知波線
〔愛称 多米街道〕
- ③西側を南北に主要地方道豊橋鳳来線

[愛称 下条街道]

④中央を南北に一般県道豊橋環状線

[愛称 青陵街道]

土地の都市的利用は99.2%を占め、幹線道路の沿線で商業地が目立ち、その他は住宅地として利用されている。幹線道路はいずれも多くの人や貨物の往来に利用されている。特に豊橋環状線は愛知大学周辺まで拡張されて、南部方面への時間が大幅に短縮された。

5 人口

旭校区	昭和30年	昭和60年	平成12年
世帯数	1,049	1,780	1,684
男性	2,362	2,531	2,072
内65歳以上	—	322	474
女性	2,696	2,831	2,295
内65歳以上	—	458	684
計	5,058	5,362	4,367
内65歳以上(高齢者率)	—	780 (14.5)	1,158 (26.5)

豊橋市	昭和30年	昭和60年	平成12年
世帯数	39,481	93,847	124,724
男性	97,750	158,389	181,294
内65歳以上	5,013	12,924	23,197
女性	105,235	163,753	183,562
内65歳以上	6,283	18,412	31,964
計	202,985	322,142	364,856
内65歳以上(高齢者率)	11,296 (5.6)	31,336 (9.7)	55,161 (15.1)

旭小学校児童数	昭和30年	昭和60年	平成12年	平成17年
男子	752	211	104	76
女子	740	195	100	94
計	1,492	406	204	170

校区の人口(国勢調査による)及び旭小児童数の推移

このような推移をみると、当校区も市内中心部(八町、松葉、松山、新川、向山、花田、羽根井)と同様に人口が減少している。一方周辺部では、ほぼ85%の地区で人口増になっている。いわゆるドーナツ化現象が数字の上にも表われている。

当校区の高齢者率(全人口に占める高齢者の割合)は、全市平均より相当に高くなっている。これに連動するかのよう、旭小学校の児童数も激減している。

当校区では、宅地や建物の棟数密度も全市の平均を上回る利用で、遊休地も少ない現状である。今後の児童数増加への期待は、何ら

かの新しい方策にかかっている。

6 公共交通機関

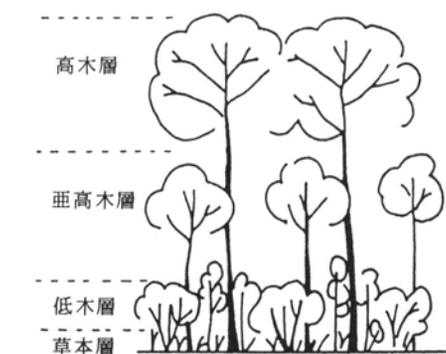
当校区の主要公共交通機関は何といても市内電車である。毎日145往復が運行されている。校区内にある藤ノ花女子高校の生徒も大勢通学に利用している。また、東田坂上・前畑の両停留所も通勤・通学・買い物など多くの人々の足となって利用されている。中心市街地を通して、豊橋駅まで約20分という所要時間も、地域の人々に愛される要因である。一方、国道1号・下条街道・豊橋環状線の幹線道路にも、豊橋鉄道がバス路線を持っている。市電とバスという公共交通機関を利用しやすい、利便性のある地域である。



市電のある風景

7 公園と緑

当校区には、南旭公園(0.08ha)と桜ヶ丘公園(1.22ha)がある。比較的自然的に残され



森林の群落構造模式(倉内:「緑をはかる」)

ている桜ヶ丘公園の植物について調べてみる。

前頁の模式図に準じて区分してみると、

①高木層の常緑樹として

クスノキ、クロ松、ヒノキをはじめヤマモモ、ビワ等7種類がある。

②高木層の落葉樹として

ソメイヨシノ、イチョウ、その他サルスベリ、プラタナス等10種類程がある。

③亜高木層の常緑樹として

金木犀、山茶花、椿、榊、その他夾竹桃、南天等8種類が見られる。

④亜高木層の落葉樹では

ムラサキシキブ、ムクゲ等がある。

⑤低木層の常緑樹では

カンツバキ、ツツジ、クチナシ等

⑥低木層の落葉樹として

アジサイ、その他2種類が見られる。

以上のように、そう広くない公園ではあるが、多種多様な樹木が見られる。

ここで“公園つれづれ”を綴ってみる。

「先ず、3月初めにはマンサクの黄色い花が目をはびます。つづいて、真っ白なハクモクレンが鮮やかです。

さあさあ、お待ちかね。ソメイヨシノの定番です。全園がピンク色に明るく包まれます。みごとです。一週間ほど楽しみましょう。あれあれ、今度は濃いめのピンクが咲きはじまりましたよ、八重桜です。これはボリュームがあって素敵です。花が緑色のサクラなんて知ってますか？御衣黄桜ですって。三本もありましたよ。目を転じると、道知辺稲荷社の片隅では花水木が清楚に開き始めました。

暫くすると、クスノキを始めとして、新緑が全園をつつみ込みます。言葉では言い尽くせないほどの緑の饗宴です。自然の力の偉大さに敬服です」

この校区から「とよはしの巨木・名木100選」に次の3本が選ばれた。

①旭小運動場北のクスノキ

C=3.35m S=22m×19m
H=18.4m E=100年以上



②桜ヶ丘公園のクロマツ

C=3.03m
S=21m×15m
H=21.6m
E=200年以上

③不動院墓地のスタジイ（椎の木）

C=3.16m S=13.5m×16.9m
H=15.1m E=200年以上



C = 目通し幹周り	S = 枝張り
H = 樹高	E = 樹齡(推定)

第2章 歴史と生活

1 地域の歴史

旭校区には、古代から中世にかけての所謂遺跡とか史蹟とか言われる所が残されていない。また古文書も見あたらない。したがって、「豊橋市史」を始めその他の文献を手がかりとして、周辺地域を考察する。

(1) 原始

石器時代

昭和33年、当校区から3 km程の、俗に“石
ばいやま
灰山”と呼ばれた牛川鉦山の石灰岩の割れ目から、10万年前の人骨が発見された。僅か10cmたらずの左上腕人骨がわが国の考古学・人類学上に重要な発見となった。翌34年に同鉦山から成人男子の大腿骨片が発見され「牛川第二人骨」と名付けられた。同時にその付近からニホンカモシカ、タヌキ、ハタネズミ等の獣骨も発見された。



旧牛川鉦山の人骨発見現場
（「豊橋市史 第一巻」より）

山野の恵みを摘みとる採集と狩猟を主とする古代人の生活が浮かび上がってくる。原野と山林の続く、同じ洪積台地上の当地へも…。と、何か古代のロマンに駆り立てられる。

と、何か古代のロマンに駆り立てられる。

縄文時代

地球最後の氷期が終って気候も温暖になり、人々の生活が大きく変化してきた。豊橋地方の縄文早期の遺跡として嵩山の蛇穴遺跡があ

る。この遺跡は石灰岩の洞窟を利用して営まれた住居遺跡である。昭和16年からの発掘調査で縄文押型土器や石器・骨角器の他、当時の人々が食べた動物の骨や貝殻も出土した。川から採れるシジミや陸のマイマイが含まれるのはまだしも、海で採れるハマグリ・ハイガイ・カキが多数出土したことは何を物語るのか。それは9000年位前から始まった縄文海進^{じょうもんかいしん}（注1）の影響を受けていると思われる。してみると、このあたりの洪積台地は陸地として残り、狩猟・海撈が行われた所であったであろうと考えられる。

注1：縄文海進-2万年位前までの氷期（海退）から、気候の温暖化が進み、縄文早期の終りから前期（約7000年前～6000年前）にかけて海水面上昇した現象である。沖積平野は殆ど水没し、河岸段丘だけは陸地として残った。



豊橋周辺の縄文海進と縄文時代の遺跡
（「とよはしの歴史」より）

弥生時代

縄文晩期に大陸から九州に水田稲作技術が伝わり、数10年かけて東海地方へと広がった。同時に、青銅器や鉄器のほか、新しい社会の仕組みや信仰も伝えられた。縄文文化の上に大陸からの新しい文化が加わって、弥生文化が誕生していった。

豊橋周辺では、この時代の農村遺跡として、^{うりごういせき}瓜郷遺跡が知られている。谷状の湿地に水田を開き、それを見おろす小高い所に集落をつくった。これまでの^{たてあな}竪穴住居ではなく、平地に二本柱の^{きりづまがた}切妻型住居であった。朝倉川流域にも水田や集落ができた。こうした集落の形式はムラとなり、クニとなっていく。

古墳時代

弥生時代も終りに近い2～3世紀にかけて、日本各地にクニといわれる集団ができた。これらのクニが大和政権によって統一され、次第に体制を整えていく時期を古墳時代と呼んでいる。クニ集団の首長（地域の支配者）をムラ人との差をつけるために共同墓地とは形態の異なる墓を築いた。

豊橋地方で確認されている古墳は288基ある。そのうち朝倉川流域には多米古墳群をはじめ37基が分布している。この時代の後期から末期（6～7世紀）にかけての円墳が多い。東田神明宮の西にある東田古墳^(注1)は、洪積台地縁端に一基だけ離れて存在している。多



豊橋市内古墳分布図（「豊橋市史 第一巻」より）

米古墳群の28基は調査されているが、市街化が進むにつれて消滅したものが多い。競輪場や東田球場造設工事の時には^{はじき器}土師器や^{すえき}須恵器が出土し、竪穴住居跡も見られた。

注1：東田古墳一明治12年御嶽社を造るために、丘の頂を平に削ったところ、鏡と直刀が出土し、初めてこの丘が古墳であることがわかった。それまではイネホシ場と呼ばれて、草の生えた小山であって、墳丘は完全な形で残されていた。5世紀頃に造られた前方後円墳で、この地方の豪族の墓と考えられている。出土した鳥文鏡は日本製で農耕祭祀儀礼や呪術的権威づけに使われていた。

(2) 古 代

奈良時代

大宝元年（701）大宝令により律令制度が整い、全国が60の「国」に区分された。東三河地方は「^{ほのくに}穂国」と呼ばれていたが「三河国」（現西三河）と合併して新しい「三河国」が誕生した。国の下に「郡」がおかれ、この地方では豊川右岸を「^{ほのおぐん}宝飫郡」、朝倉川以北を「^{やなぐん}八名郡」、その南から渥美半島までを「^{あつみぐん}渥美郡」の三郡がおかれた。その下に「里」（後に「郷」）が定められた。八町付近は^{あくみ}渥美郷と呼ばれていた。（平安時代の「和名類聚抄」による）

中央と地方との緊密な連絡のために、全国的に交通制度が整備された。^{とよがわ}飽海川（豊川）の河口約4kmの渡河は多くの困難があり、令制によって二艘（後に四艘）の渡船が用意された。当時の渡河地点は不明であるが、牟呂の坂津から石塚・飽海の間と考えられている。

神社制度が整ったのは大化改新以後のことで、地方では国司が神社の管理にあたった。この地方では石巻神社が朝廷から幣帛を賜わり式内社となった。

寺院では、赤岩寺・普門寺・東観音寺がともに神亀・天平年間の727年と733年に聖武天皇の本願により行基が開創している。

平安時代

政治の混乱から脱するために都が京都に移

されたが、地方政治の乱れは律令制度の崩壊による荘園の増加で止まらなかった。

豊橋地方は伊勢神宮に近いという地理的条件にも恵まれて、^{かんべ}神戸・^{みくりや}御厨・^{みその}御園と呼ばれる神領が多くあった。飽海^{はじかみ}神戸・^{その}吉田御園(八町)・^{はじかみ}董御園(東田)などは最も早く設定された。神宮側の拡張運動にもよるが、在地の小土豪や有力農民達が私有地を国司の取奪から逃れるため、進んで神領に寄進したことにもよるのである。神領には初め社殿が設けられていなかったが、次第に神明社(祭神天照大神)や御^み楯社^{たて}(^{注1})を造営して祭祀するようになった。平安末期には安久美神戸神明社・東田神明宮が創建された。また、その頃



豊橋周辺の荘園 (「豊橋市史 第一巻」より)

民衆の信仰の中心として、仁連木村に不動堂が、蟬川に太蓮寺(真言宗)が建てられた。

飽海の渡しは“^{しかす}が^{注2}の渡し”とも呼ばれて有名であった。それは天暦8年(954)村上天皇が内裏の屏風に多くの名所と共にこの渡しを描かせたことにより、名高い歌人達に詠まれたり清少納言の「枕草子」に取り上げられたりしたことによるが、河口が広く波風も強く、度重なる氾濫で川筋が変わる難所でもあった。

注1：御楯社一神宮で楯山神事に使用した忌楯を、御師などの手によって地方関係者に配布し、これを大神宮御楯と唱え御霊代とし、社殿を造って豊作を祈願した。

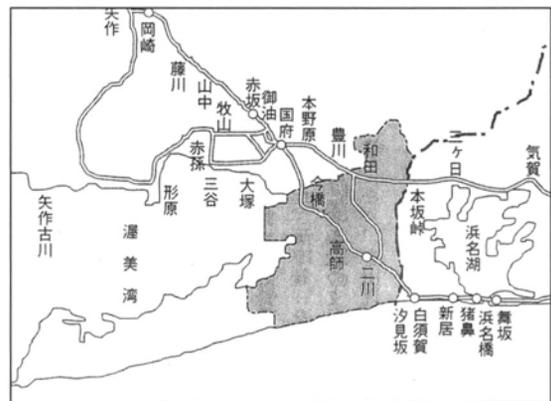
注2：しかすが一原義は明らかではないが、「志之須賀」シノスガ(参河国名所図絵)とか、「洲処」スカの意(豊橋市史)とかいわれている。語義は「しかし、さすがに」の意味で「そうはいうものの、しかしながら」などと訳す。枕草子は「しかすがに」(さすがに)の語義に興味をひかれたのであろう。

(3) 中世

鎌倉・室町・安土桃山時代

平安末期の地方政治の荒廃は武士の抬頭となり、源頼朝が鎌倉に幕府を開いて武家政治が始まった。伊勢神宮から神領への通知文に「神主禰宜等、朝家ニ背キ源氏ニ同意ス」と記されていて、神宮領の多い豊橋地方は源氏に味方していた。新^{しんかんべ}神戸(飽海)・^{はじかみ}董御園(東田)の荘園を基盤とするこの地域の武士達も源氏の支配下に入った。幕府は地方行政の要として主護・地頭をおいて支配力を固めようとした。しかし、時が経つにつれて荘園に配置された地頭の中には、与えられた職権(警察権・裁判権・年貢徴収権)を乱用して領主や荘民を悩ませるようになった。敬神の念の篤かった頼朝の遺志をついだ幕府は建久10年(1199)新神戸御厨・董御園等の地頭職停止を命じ、警察権まで神宮側に与えた。したがって、この地方は他の地域に比べて武士の横暴が少なかった。

鎌倉時代は政治の中心が鎌倉と京都にあっ

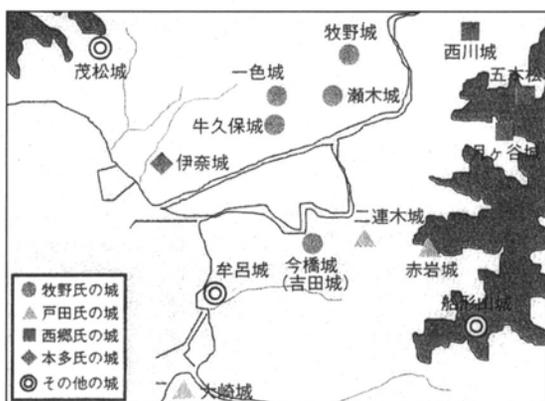


中世街道想定図 (「豊橋市史 第一巻」より)

たため、両地を結ぶ東海道の重要性が増した。平安後期から、海水位の上昇や水路の変動などで飽海川河口部の渡船が危険となり、志香須賀の渡しからより安全な豊川宿利用に移った。鎌倉中期には前頁のように三コースがあった。中のコースは江戸時代の東海道と区別して「鎌倉街道」と呼ばれている。鎌倉中期以後は河口部が交通路の主役に返り咲いた。

貞応2年(1223)の紀行文「海道記」にこのあたりの原野のことが記されている。“……豊川宿を立ちて野くれ里くれ遙々と過ぐる。峯ノ原(牛川から仁連木あたりの原)という処あり。日は野草の露より出でて若木の枝に昇らず、雲は嶺松の風に晴れて山の色天と一に染みたり。遠望の感心情つなぎがたし。『山の端は露より底にうづもれて、野末の草に明るしののめ』やがて高志(師)山にかかりぬ。石利を踏みて火敵(打)坂を打ち過ぐれば……”と、いかにも見はるかす野原であったことが思われる。

暦応元年(1338)足利尊氏が京都の室町に幕府を開いた。地方に任せられた守護は直轄領を守る奉公衆(武士)を養って戦時に備えた。神宮領の地頭も次第に横暴となり神役の権限を侵害するようになった。飽海御厨も薑御園も神宮の保護下にあったが、時の流れには逆らえず土豪の前にその特権的立場を失っていった。政権抗争や土一揆が頻発するなど



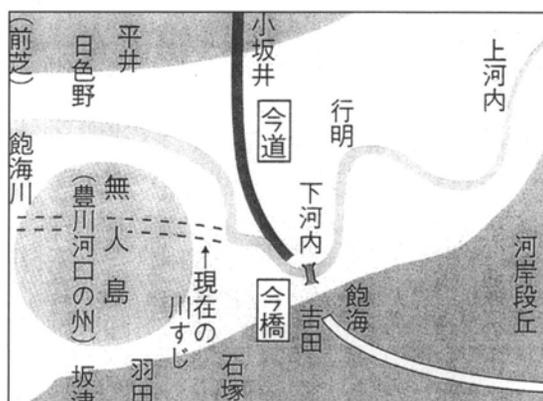
戦国時代の東三河の城(「とよはしの歴史」より)

政情不安の中で世は下剋上・弱肉強食の戦国時代となった。

応仁の乱以後、各地の豪族は勢力の拡大を図って鎬を削っていた。このあたりでは、田原の戸田宗光が進出してきて、明応2年(1493)二連木(仁連木)に築城し、薑御園を支配下に治めた。永正11年(1514)戸田憲光は亡父宗光の追善供養のために寺を創建し全久院と名づけた。また、天文22年(1553)戸田宣光は東田神明宮の社殿を造営寄進した。武田信玄・勝頼が再度(1571・1575)にわたり吉田城に攻め込んだ時は、二連木城でも激しい戦闘が繰り広げられた。

今橋(注1)城(吉田城)は永正2年(1505)牛久保城主牧野古白が西三河の松平氏(徳川)の進攻に備えて築城した。現在の城址本丸東側にある金柑丸跡を中心とする一帯が今橋城の本曲輪であった。大永2年(1522)今橋城を吉田城と改名した。その後も交通上の要衝である吉田城をめぐる争奪戦は今川・戸田・徳川・武田の間で続いた。

政治の動乱と打続く戦乱の中で、世の人々は心の支えを宗教に求めようとした。鎮護国家のための仏教ではなく、下層武士や民衆にも受け入れられる新しい宗教が必要になり、臨濟宗・曹洞宗・浄土宗・日蓮宗などが広まっていった。文安3年(1446)浄土宗の太蓮寺が現在地に移転されたり、大永2年



十三世紀ごろの豊川河口付近(「とよはしの歴史」より)

丸に移し祭祀した。吉田城曲輪の鬼門（北東）にあたる神明社と八幡宮（現安久美神戸神社に合祀）を、裏鬼門の悟真寺と天王社（現吉田神社）を手厚く祭祀した。三の丸の外側は土塁と堀りとで隔てられて、東・南・西の三方に武家屋敷を配置していた。更に東西二か所（現松葉町と旭町）に厳しく区別された足軽屋敷があった。

池田照政時代から始まった城下町づくりは、小笠原四代の頃までにほぼ完成した。武士と町人の雑居は固く禁じられ、町人の居住区域は外堀の外に配置された。表町12か町、裏町12か町合せて「吉田惣町24町」と言われた。その後、寛永年間に出来た新銭町や寛文年間に開発された河原町（現瓦町）も吉田の町に含まれた。町は商人と職人、あるいは職業別に配置された。城下に入る東西の二か所（下モ町と坂下町）に惣門があり、番所で旅人に対する規制が行われていた。

②宿場町吉田

この時代、江戸と京・大坂を結ぶ最重要交通路は東海道^(注1)であった。街道の維持管理は道中奉行の監督のもと、当該藩が担っていた。「重き御通行」の場合、往還通りの掃除

町名	現町名	貞享5年 (1688)	正徳2年 (1712)	寛延3年 (1750)	文政2年 (1819)	天保9年 (1838)
船町	船町	90	84	113	83	84
田町	湊町	70	74	76	73	74
坂下町	湊町	28	28	30	25	26
上伝馬町	上伝馬町	64	64	77	61	62
本町	新本町	34	34	36	33	34
札木町	札木町	65	68	71	63	68
呉服町	呉服町	34	33	40	32	33
曲尺手町	曲尺手町	66	64	68	74	65
鍛冶町	鍛冶町	61	42	62	61	62
下モ町	鍛冶町	21	21	24	22	23
今新町	西新町	60	37	61	56	57
元新町	東新町	38	39	43	26	27

吉田表町戸数の推移
 (「豊橋市史 第二巻」より)



東三河の主な街道 (「とよはしの歴史」より)

は近郷の村々に割り当てられた。元新町（現東新町）や瓦町は自村の往還を担当した。

宿場には宿駅として「人馬継立て」が課せられていた。貞享元年の「吉田宿書上」によると、元新町は役門数23軒で常時5人の平役^(注2)を供出することが記されている。

この地域では、東海道を外れて他の地方へ行く脇街道として別所街道がある。元新町を起点に飽海を経て八名郡を北上し、設楽郡から信州飯田に至る街道である。

注1：東海道—江戸を中心とする五街道の名称は「駅肝録」により統一された。それによると、東海道は「海端ヲ通り候ニ付、海道ト可申候」と記されている。他は中山道、日光道中、甲州道中、奥州道中となっている。

注2：平役—人足役のことで、御飛脚御状箱、御用物、歩行荷物人足、御荷物番役、旅人の病気や囚人泊りの番人などの雑用を勤めた。役を勤めた町内には屋敷税免除の特権が与えられた。

③新田開発

江戸時代になると、藩財政のため全国的に新田開発が行われた。吉田領内では江戸初期から始まり、大規模開発は寛文年間に集中した。この地域では平川新田（池見町の東方）がある。下岩崎・田尻の西から仁連木・瓦町に至る原野田尻原を、寛文7年（1667）に篠田村（豊川市一宮町）の弥兵衛と榎河岸の利兵衛が藩主小笠原長矩に願い出て開発した。記録によれば、田41町7反（約41ha）畑17反7畝を12年がかりで完了した、とある。ここは洪積台地上で水利に乏しく用水の確保が困難であった。岩崎葦毛地区に溜池（利兵衛池）

を築き、その水を用水路で平川地区に新設した水神池に溜めた。用水路が他村を通るため承諾に難渋したが、藩の仲介でやっと解決した。

これより先、承応3年（1654）城主小笠原忠知が郡代長谷川太郎左衛門に命じて、向山大池を造らせた。吉田城の外堀用水と吉田方への灌漑用水を目的とした、池面10町2反4畝（約10ha）の大溜池であった。

④商工業の実態

吉田における商工業は、ほかの城下町と同様に製造業販売業ともに制限を受けていた。藩の財政難対策として、農民には定免制（免＝税）で厳しく年貢を取り立て、商工業者には「町方運上（商工業税）」を課していた。その代償として営業を保護したり独占を許していた。例えば、瓦職人は鍛冶職のように一か所に住まず瓦町のほか花ヶ崎・中芝（柴）に6・7軒あったが株仲間（組合）を組んでいた。一般の町屋は瓦を用いないので顧客は藩役所や社寺であった。大火による江戸藩邸の御用瓦や暴風雨での城内修復御用瓦などを調達する独占仲間であった。和田村や高足（師）村で新規に瓦焼きを始めた者に対して、株仲間は製造販売差し止め方を役所に申し出て禁止させてしまった。また、吉田惣町には紺屋職が天保3年に36軒あったが、これ以上の増加を防ぐために株仲間を結ぶことを願い出た。その冥加として藩御用染め20反を上納することで認可された。その後吉田町中には新しく紺屋を始める者はなかったが、吉田町に接する瓦町口、北飽海口、新銭町口などに就職の紺屋ができた。町方紺屋は株仲間入りを提唱したが、在方紺屋は百姓の作間稼ぎの仕事であることを理由に仲間入りを拒んだ。冥加として御上の御用染を奉仕申し上げることで黙認された。

⑤地域文化

- ・吉田の藩学の流れは、国学の羽田野敬雄を始め洋学・医学・英学・芸能まで著名な人物が輩出し、三河の学問の名を広めた。
- ・藩校時習館は宝暦2年（1752）藩主松平信復によって設立され藩士の子弟を教育した。庶民の子弟は寺子屋や私塾で読み・書きの初歩的教育を受けた。寺子屋は藩内に200か所位あり殆ど幕末に開かれた。入門のきまりはないが、大体7・8歳になると入り、4年間通う者が多かった。年間200日ぐらいで、朝五ツ（午前8時）から夕七ツ（午後4時）まで主として一人の師匠が見ていた。この地域では、旭町の鈴木友七宅で約25人、旭町の市川多賀作宅で約20人、飽海村の青龍寺で約15人、仁連木村の全久院で約22人、瓦町の寿泉寺で約30人、指笠町の願成寺で約150人であった。女子は針師匠について裁縫を習う程度であった。
- ・吉田の茶道は明暦元年（1655）藩主小笠原忠知が江戸から山田宗徧を招いて始まった。茶道方として30石5人扶持を与えられ、小笠原四代43年間茶道の普及に尽力した。利休流の庶民的な侘茶を広め、臨濟寺には自作の庭園のほか銘入りの茶杓・花入れ・茶碗や遺愛品が蔵されている。
- ・その他、この地域出身の異彩の人として将棋の松坂福四郎がいた。福四郎は飽海村の生まれで幼少の頃から将棋に優れ13歳で江戸に出て修行した。安政3年24歳で三段に昇り、55歳で七段にまで昇進した。菩提寺である太蓮寺に福四郎の墓碑がある。

⑥江戸時代の寺社と民間信仰

- ・中世末期から戦乱が相次ぎ社会が混乱して村落が衰微したため、神社も荒廃したり兵火にかかったりしてきた。しかし反面地方に豪族が輩出して、根拠地や近在の神社に特別の保護を加えたり社領の寄進・安堵・

社殿の再建などがなされた。この時代この地方では30社余が新しく創建された。それは人口の増加や領地の拡張などによる分村、あるいは新田・新畑の開墾などによってできた新村に、鎮守の宮が創設されたことによるものである。このあたりでは、寛永7年に岩田の琴平神社、万治4年に飽海の素盞鳴神社、寛文5年に瓦町の神明社がある。吉田の町人の信仰心に支えられて現在に引き継がれている神事も多い。安久美神戸神社の鬼祭り、湊町神社の御衣祭り、吉田神社の祇園祭り、東田神明宮の稚児神楽など。

徳川幕府はキリスト教厳禁政策と幕藩制維持のために「宗門改めと寺請檀家制度」を全国に実施した。つまり、全ての庶民がいずれかの寺の檀家になることを義務づけたのである。転居、婚姻、旅行、奉公など家を出る時には寺が発行する「宗旨手形」が必要であった。信仰対象の異なる諸社の禰宜神官もいずれかの寺院に属させられた。この時代になって、新たに創設された寺院や他所から移転してきた寺院は吉田領内で46か寺を数えた。このあたりでは、元禄元年に飽海の真言宗青龍寺が、延宝2年に瓦町の寿泉寺が老津から、寛文4年に仁連木村の臨濟寺が建てられた。

中世以来武家の手で主宰されていた祭礼・仏事は町人・百姓がとって替わり、平等の立場にたって頭屋制や講の結成が促され、地藏を始め路傍の石仏群の建立も寛文期を境に活発化した。所謂、民間信仰は同族・同姓・小土縁の屋敷神から稲荷・大黒・恵比寿・庚申^(注1)・秋葉・金毘羅・水神・山王などの同信心結社による諸講、道祖神・辻地藏のように歴史的地理的環境と生活様式に支持されたものまで、さまざまな信仰が広まった。東田神明宮の境内に「庚申社」が立派に建てられている。

注1：庚申—平安時代に中国からもたらされ、道教の説く「三尸の説」を信じ延命長寿・無病息災を祈念し夜を徹して飲食した。60日毎に巡ってくる庚申の日に当番の家が祭祀者となって青面金剛をまつる。
宮廷→貴族→武家とひろがり、室町時代に一般庶民へと伝わった。
現在豊橋市内に100余の庚申塔がある。

⑦吉田を襲った大災害

・地震

宝永の大地震—宝永4年(1707)10月4日
震源地は東南海沖でM=8.4。吉田城内では本丸から三の丸に至るまでの建物・櫓・門・石垣・土塀まで全て倒壊されつくし、殆どの武家屋敷も潰れた。町屋の全壊323戸、半壊262戸、破損423戸で全ての家が被災した。この地震による津波で浜名湖口の今切も大打撃を受け、東海道の今切渡海も不通になった。

安政の大地震—嘉永7年(1854)11月4日
震源地は遠州灘東部でM=8.3。吉田城内の主要な櫓が被害を受けた。町屋の全壊128戸、半壊154戸を数え死者14人、高潮による溺死者11人を出した。

・火災

宗淳火事—安永8年11月3日、吉田本町の医師藤井宗淳方から出火した。吉田の中心街11か町384軒を焼失した。しかもその中には問屋場・本陣・脇本陣・旅籠屋60軒などが含まれ、宿駅としての機能は一時停止してしまった。この火災を契機に町方火消組が設けられ、これが明治に至るまで継続していった。

・気象災害

記録に残された異常気象の災害も合計29回ある。暴風雨6回、洪水5回、洪水による大橋の流失3回、干ばつ5回だった。

〔付記〕「ええじゃないか」の発端

慶応3年(1867)7月14日、牟呂村で伊勢外宮の御祓が一軒の屋敷の竹垣きわに降っているのが発見された。発見者の子供がそ

の夜急死し、その御祓に疑問を抱いた村女が精神異常で翌日死亡した。村人はそれらを神罰と考え盛大に臨時祭礼を催した。このお札降りが発端となり、幕末の不穏な空気の中で民衆のエネルギーが爆発していった。

藩主名	石高	入封襲封年	備考
(竹谷松平)	万石		
まつ 松平 家清	3	慶長6年(1601)	武蔵国八幡山より
まつ 松平 忠清	3	慶長15年(1610)	相 続
(深溝松平)			
まつ 松平 忠利	3	慶長17年(1612)	三河国深溝より
まつ 松平 忠房	3	寛永9年(1632)	相 続
みづ 水野 忠清	4.5	寛永9年(1632)	三河国刈谷より
みづ 水野 忠善	4.5	寛永19年(1642)	駿河国田中より
おがさわら 小笠原 忠知	4.5	正保2年(1645)	豊後国杵築より
おがさわら 小笠原 長矩	4	寛文3年(1663)	相 続
おがさわら 小笠原 長祐	4	延宝6年(1678)	相 続
おがさわら 小笠原 長重	4	元禄3年(1690)	相 続
く 久世 重之	5	元禄10年(1697)	丹波国亀山より
まき 牧野 成春	8	宝永2年(1705)	下総国関宿より
まき 牧野 成央	8	宝永4年(1707)	相 続
(大河内松平)			
まつ 松平 信祝	7	正徳2年(1712)	下総国古河より
(本庄松平)			
まつ 松平 資訓	7	享保14年(1729)	遠江国浜松より
(大河内松平)			
まつ 松平 信復	7	寛延2年(1749)	遠江国浜松より
まつ 松平 信礼	7	明和5年(1768)	相 続
まつ 松平 信明	7	明和7年(1770)	相 続
まつ 松平 信順	7	文化14年(1817)	相 続
まつ 松平 信宝	7	天保13年(1842)	相 続
まつ 松平 信璋	7	弘化元年(1844)	相 続
まつ 松平 信古	7	嘉永2年(1849)	相 続

吉田藩の石高と歴代藩主

(5) 近 代

明治・大正時代

①吉田から豊橋へ

明治2年2月、吉田藩主大河内信古（松平姓から大河内姓に復姓）が藩籍奉還を願い出た。同年5月新政府の弁事伝達所から「今まで吉田藩と呼んでいたが、今回改称するから呼び方を取り調べて2～3申し出るように」との命令を受けた。数日後「豊橋・関屋・今橋」の三つの試案を申し出た。6月19日付の藩知事任命書に「豊橋藩知事被仰付候事」とあり、吉田は公式に豊橋と改称されることとなった。

②明治維新と近代化

明治4年には廃藩置県、官営郵便制度の布告、新貨条例の下での紙幣発行、華士族の職業の自由化、戸籍法戸長制度の制定があった。

明治5年には土地売買の解禁、学制の公布、国立銀行条例の施行、太陽暦の採用があった。

明治6年には徴兵令の公布、地租改正条例の公布など世の中は近代化へ大きく歩み出した。中央政府や県の行政機構の整備で混乱と戸惑いの中、文明開化の足音と共に街は変貌していった。

③豊橋町・豊橋市の誕生

明治21年に市制・町村制が公布され、その翌年から内務大臣の指示により順次施行された。豊橋町は10月に旧吉田宿を構成していた23か町、人口12,339人でスタートした。時を同じくして瓦町村・仁連木村・岩崎村・飯村と三ノ輪村が合併して渥美郡豊岡村となった。また、同27年豊橋町は豊橋村との合併を議決し、県知事に認可を申請した。

豊橋の市制施行問題は日露戦争前から大きな争点となっていたが、戦後推進派の町長大口喜六によって再び動き出した。県会議員も兼務していて、対県交渉も順調に進み、同39年(1906)内務省告示を以て市制施行が認めら

れたと同時に前提条件となっていた花田村・豊岡村を合併した。人口14,000人余、初代市長大口喜六で全国62番目の市が誕生した。

年月日	仁連木 瓦町 上岩崎 手岩崎 下洗川 田平尻川
明治11 12.28	東田村 岩田村 豊橋町 豊橋村
明治17 8.11	東田村 瓦町村 岩崎村 岩田村 三ノ輪村 飯村 花ヶ崎村 羽田村
明治22 10.1	豊岡村 花田村
明治28 2.25	豊橋町
明治39 7.16	豊橋町
明治39 8.1	豊橋市

町制・市制への推移（「豊橋市史」より）

④軍都豊橋の出現

徴兵令施行から10年、陸軍が現有の歩兵14個聯隊を更に10個聯隊増強の計画を立てた。朝鮮半島を中心とする隣接の諸問題に、力に対応する兵力増強の国策によるものであった。明治18年4月歩兵18聯隊が名古屋鎮台の仮屯営から豊橋へ移動し、32,000坪の吉田城址に出来た新兵舎に入った。日清・日露の戦役を通じて、軍隊と市民の一体感さえ芽生えた。明治40年に総代会が、軍隊及び軍人を待遇する目的で豊橋市尚武会を組織した。入営、応召、出征、帰還等の歓送迎行事は昭和の戦中まで続いた。その他の兵事関係団体が軍都らしく強力に結成されていった。

零細な蚕糸業中心の地元資本だけでは市の発展はあまり期待できないと、市の発展策に頭を悩ませている時、陸軍が4個師団増設の計画を発表した。そこで、市は「師団設置期成同盟」を組織して誘致運動を展開した。師

団設置の条件の一つとして、市長は陸軍と札木・上伝馬にある遊廓を適当なところへ移転することを約束していて、東田遊廓が実現した。明治41年11月高師・天伯原の広大な演習地を擁して堂々と第15師団が開庁した。師団の設置は町の様相を一変させた。八町・向山とそれに隣接する高師村を拠点に師団関係の施設・企業・商店が広がり文字どおり軍都の色彩を濃くしていった。

⑤主要道路網の整備

明治21年に東海道線開通とともに豊橋駅が開業し、上伝馬間600mの停車場通り（常盤通）が開かれた。当時はみかん畑と藪を横断していた、とは想像もつかない。まもなく駅前旅館が3軒、構内人力車10台前後、貨物扱いの運送屋の掘立小屋と次第に駅前風景となった。新停車場通り（広小路通）ができ市街化が広がった。

師団誘致とともに大口市政が重点的にとり組んだのは道路網の整備であった。当時は江戸時代のままで近代都市の姿にはほど遠かった。新道路の開設とともに、旧道の改修も必要であった。師団設置と遊廓の東田移転は市街が南と東へ延長される契機となった。

明治43年第一期工事の八町線（東八町～東田）・大手線（札木～柳生橋）・新停車場線の拡幅が竣工した。次いで翌年第二期工事の瓦町線（瓦町～東田遊廓）・上伝馬線（上伝馬～湊町）など9路線が着工した。市街地の新道路開設には移転料の厚い壁があったが、市債条例の認可で逐次進められていった。

⑥牟呂用水

この用水は新城市^{ひとくわだ}一鍛田で取水され、豊川左岸の台地をうねりながら流れ、豊橋市街を抜けて^{じん}神野新田を潤している。もともとは、明治20年賀茂用水（賀茂・金沢・八名井地区の灌漑用）として県の工事で一旦は完成したが、直後の暴風雨で取水堰も用水路の堤防も

町制・市制移行図表の参考





大破した。

毛利祥久の干拓した毛利新田（神野新田の前身）は賀茂用水の水路を延長して利用したいと申し入れ、再建計画に参入した。取水堰や水路幅を拡張して共同利用する契約を取り決めた。翌21年には竣工して牟呂用水と名付けられたが、またもや濃尾大地震や暴風雨で新田も用水路も大きな被害を受けた。後を継いだ神野金之助は補強改善や復旧工事を重ね、明治27年総延長24kmの用水路は完工した。長い年月と多額の費用をかけて完成した牟呂用水は1,200haの沿線田畑を灌漑して、人々に大きな恩恵をもたらせている。

⑦農村の変容

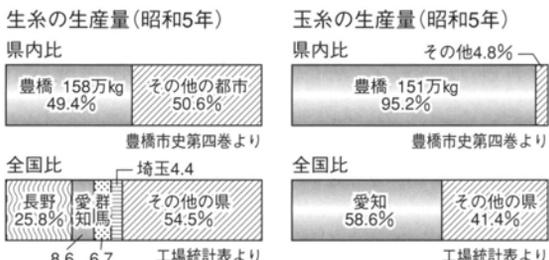
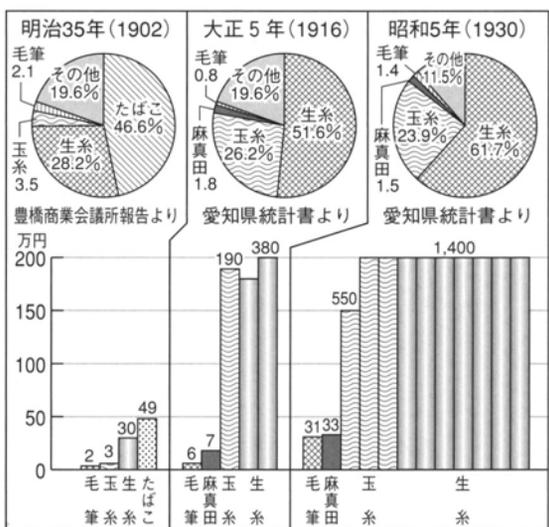
明治6年に地租改正条例が公布され、近代的土地税制が整い土地所有権も新しく確立した。地租金納化の貨幣経済の広がりには農村に大きな影響を与えた。明治34年の豊岡村では現金収入の54%が米、34%が養蚕となっていて、米と繭で約9割を占めている。米に頼る度合は依然として高いが、これまで盛んであった綿花・藍・菜種の商品作物の栽培に代わって養蚕業が副業として成長してきた。低収入の作物畑が減少して桑畑が増加していった。このあたりでも戦前までは至る所に桑畑が見られた。反面、新しい問題として桑畑の増加は麦作を田の裏作に追いやり、雑穀畑の減少は農民の食生活の変化と売却収入の減少となった。また、農作業の間に養蚕が入り労働は一段と厳しさを増した。米価も生糸価も景気によって大きく支配され、収入不安定のなか消費支出のみが定着する傾向が強まった。

⑧蚕都豊橋と旭校区製糸業

豊橋周辺での蚕糸業の起りは奈良・平安の時代までさかのぼることができる。延暦15年(796)三河・伊勢などの国から養蚕に習熟した婦人が東北地方に派遣され指導にあたったことが「日本後紀」に記される程であった。

近世になって一時衰退したが、明治になってから殖産興業の時流と農民対策・士族授産と結びついて再び発展した。この地方の製糸業は、明治9年上細谷村の庄屋であった朝倉仁右衛門が仲間5人と協議して、関屋で50人操りの足踏みダルマ製糸を始めたのが最初である。技術・経営の未熟さから失敗したが、先進地（群馬県官宮富岡工場・福島県二本松製糸）で学んだ者の帰郷を待って、同15年仁右衛門等は上細谷に県下初の株式組織で細谷製糸会社を創設した。

同20年二川の^{おぶち}小淵志ちが玉糸製糸^(注1)技術を改良して糸徳製糸工場を、翌21年大林宇吉は志ちの協力を得て寺沢に玉糸製糸工場^{うきさち}を建てた。その後、同29年には豊橋製糸株式会社や三河製糸株式会社が設立され、豊橋地方の器械製糸工場は増加の一途をたどった。生産高・工場数は昭和4～10年が豊橋蚕糸界全盛期だった。



豊橋の主要産物生産額 (「とよはしの歴史」より)

旭校区では東新町や蓮田町に金子・糸徳・岡本・伴・まるはち・小黒・岩本等の製糸工場が煙突を並べていた。ここでは最後まで残った金子製糸について記す。

創業者金子丈作は製糸業日本随一の岡谷市で研修を重ね、明治40年に小松原から東新町へ転出して製糸業を始めた。昭和2年から撚糸業も合わせ操業し、従業員200人を抱える大工場であった。然し同11年頃から製糸業界は軍需産業に圧迫され始め、同16年蚕糸業統制法が公布され蚕糸類の配給統制が実施された。かつて200軒余あった豊橋の製糸工場も同18年には軍需工場化や整備廃業で僅か30軒のみと衰退していった。壊滅的大打撃となったのは何と云っても20年の豊橋大空襲で、被害を免れた業者は6軒のみであった。その後も、戦後生まれのナイロン糸製品におされて、残った業者も姿を消していった。金子製糸（撚糸）も亦同じ運命に追い込まれ、平成2年1月に幕を閉じることとなった。

注1：玉糸製糸—普通、製糸は一匹の蚕が作る繭（精繭）の繊維から作られる。ところが、二匹の蚕がつくる形の大きい玉繭からとる繊維は、節があって質的に劣っていた。商品価値が低く、くず繭と呼ばれ真綿の材料に使用されていた。二川の小淵志ちのお蔭で上手に糸をホグスことができるようになった。昭和4・5年頃には豊橋の玉糸製糸は全国生産の8割を占め、「玉糸の豊橋」といわれ、全盛期であった。

⑨神仏分離

明治新政府は神仏分離の政令を矢つぎ早に発した。豊橋藩では一部で離檀改宗（寺院檀徒の神道への改宗）の混乱はあったが、諸藩に見られるような廃仏の暴挙は少なかった。寺院領は境内を除いて上地（政府が買収する）せしめられる代わりに麩米（扶持米）を給せられた。無檀無禄の寺院は廃寺となって整理された。庶民子弟の教育の場となっていた寺子屋のうち51か所は寺院であった。新学制になってもそのまま寺を提供していたのは全久院をはじめ23の寺であった。

神社は明治4年の神社制度の確立によって社格や神官の職制が定められた。豊橋地域では郷社が東田神明社はじめ6社、村社が瓦町神明社・豊城神社はじめ102社、無格社47社に夫々社格が指定された。神領地も境内を除いて一切上地を命ぜられたが、神饌幣帛料として内務省からの供進を受けた。

明治33年、寺院・神社を管轄していた内務省社寺局を廃して神社局と宗教局を置いた。更に大正2年宗教行政と教育行政の関連から宗教局を文部省に移管し政府支配下に入った。

⑩学制の発布

明治5年、新政府は「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」事を期して学制を布告した。以後教育令・改正教育令・小学校令と幾度となく制度の改正を重ねた。同23年小学校就学が義務づけられ修学年数3～4年とした。同36年に初めて国定教科書ができ、国家主義の色彩が鮮明になっていった。同40年に義務教育が4→6年に延長され、県下の就学率は男子98.7%、女子で96.6%と明治期の最高となった。当時の豊橋市には豊橋高等・岩田尋常高等・花田尋常高等の3校と尋常科のみの東田・八町・新川・松葉の計7校であった。製糸業の急激な発展と市街の駅方面への広がりで見学児童が増加し、同41年に狭間尋常小が、同45年に松山尋常小が増設された。

一方、中等教育では明治26年に私立補修学校時習館が開設され、同33年に県立第四中学校、大正11年に県立豊橋中学校と改称していった。明治35年三河初の女学校として町立高等女学校が西八町に創設された。同年実業学校として私立豊橋裁縫女学校も開校した。高等女学校は市制施行とともに市立高女となり現旭小の地に新築移転した。また、大正15年に県立豊橋第二中学校が認可され、現青陵中学校の地に開校した。

⑪都市計画法の適用

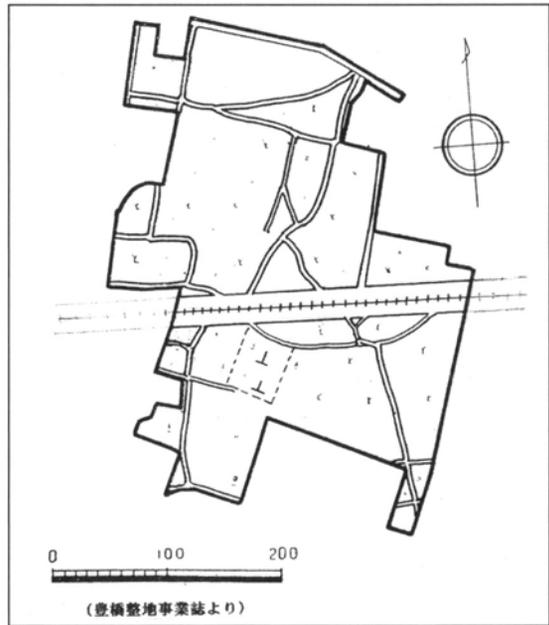
・明治末期から初代市長大口喜六の市政下道路網の整備は着々と進められ、大正初期には豊橋の街の骨格はほぼできあがった。しかし、第一次世界大戦がもたらした日本資本主義経済の発展と都市の人口集中は豊橋へも及んだ。大正8年には豊橋の人口は大戦前より13,000人増の66,000人となり、本格的都市機能の整備が課題となった。

大正12年都市計画法の適用が内務省から認可され、市としては市民の理解を得るため啓蒙活動を重ねた。都市計画事業には商工業地区の設定・主要道路の開発と拡張・上下水道の整備・公園計画など多方面にわたっていた。これらの諸施策は大戦後の経済恐慌や昭和初期の金融恐慌の影響を受け、前途多難であった。

市街路の拡張については、法に基づく受益者負担（工事費の3分の2）の規定を公示して理解を求めた。東新町・瓦町・魚町などは用地提供や障害物の自費移転を積極的に協力した。第一期工事は八町線（西八町～東田遊廓）・牟呂線・花田線の拡幅が進められ、第二期工事は駅前広場を含む幹線15路線の改修であった。このほか周辺町村の道路も整備され、昭和8年に瓦町南裏・新町橋を經由する豊橋・二川間の省営バス（国鉄バス）が開通した。

・都市近代化施策に呼応して土地区画整理事業が宅地造成を目的に随時進められた。昭和2年東田土地区画整理組合が設立された。幹線道路に沿った約7ha余の区画整理事業であった。本市最初のものであり、都計に従ってこの事業に着手するのは勇氣ある英断であった。既に住宅地化された東田遊廓を中心とする歓楽街への接続的な発展を期して、道路造成と区画の整理を目的とした。組合設立に際し、趣旨賛同を取付けるのに

は多くの困難があった。発起人代表今西卓^{いまにし たく}等の啓蒙説得が功を奏し、組合員143人で設立認可が下りた。排水路は隣接集落との交通上の関係もあり、水路と道路の拡張を図った。道路は一部を10尺（約3m）としたが、多くは3～4間（5.3m～7.2m）とし昭和初期では先進的の道路拡張がなされた。陸軍墓地を公園緑地の一部に含ませるなど、



B 東田土地区画整理 現形図 縮尺単位はm



A 東田土地区画整理 確定図

造成上の苦心があったが事業は着実に進展を見せ、13年半の歳月をかけて工事は完了した。工事区全体の特徴は畑地の減歩が30～40%という大きな割合を示し、農耕地を目的としたことでない区画整理事業のねらいが如実に証明されている。同地区の宅地地積は273haから573haと倍加され、道路地積も約3倍に増加して市街地東進の都市計画基本構想に大きく寄与したのである。組合員の理解と協力の所産であったと言える。

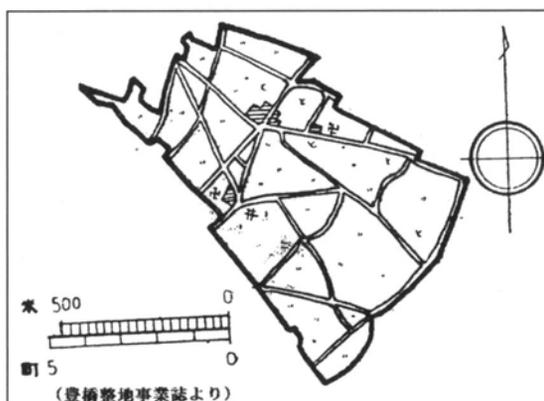
続いて、昭和4年に東部土地区画整理組合が設立された。大正14年に市内電車が東田遊廓まで敷設され、東田台地の南方瓦町方面への市街地形成と発展が予想されていた地域であった。丸地清次等が発起人となり530人余の土地所有者（在来の地主は2/3）に話をかけ全員一致の賛同を得、翌年3月に工事に着手した。地目別にも大

部分が畑地で宅地面積も僅少であり工事を実行するに都合がよかった。市街化を阻む理由はどこにもなく工事は順調に進められた。同13年には工事完了であった。同15年から池見・住吉・老松の町名改称字区域変更を実施。新規町名拒否者には旧称使用も可とした。

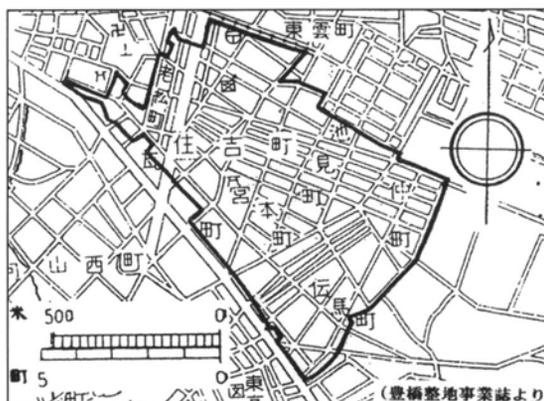
豊橋の電灯会社は明治27年に梅田川上流の水車場を発電所として始まった。16燭光の電球300個分の電気量であったが、水不足などで発電量もままならず「点灯常ニ如意ナラズ、光度尚通常『ランプ』ニ及バザルコト往々」と揶揄されていた。翌年牟呂の大西地内に牟呂用水を利用した水力と火力併用の発電所を建設した。僅か一年で取付け電灯は3倍以上にまで進歩した。軍隊・官庁・商店街・一般家庭へと広がり、日露戦争後は企業工場の電力需要も高まった。同39年社名を豊橋電気株式会社と改め、作手村に見代発電所を建設した。15師団誘致にともなう電灯・電力の需要に応じるため下地の火力発電所で急場をしのぎ、同45年に鳳来町に長篠発電所を建設した。東田坂上の辻に建てられた大きな街路灯が評判となり、近所の家庭への郵便物が「大電気」の宛名でも届けられる程であった。

また、豊橋瓦斯会社は明治42年に神野三郎等15人が発起人となって設立された。明治末期に東八町・市役所・駅前など8か所にガス街灯が設置され、夜のとばりの中に青白い光を放ち道行く人の目をひいた。

近代都市として豊橋を発展させるためには、市内交通機関の充実は絶対に必要であった。大正10年豊橋電気株式会社の専務武田賢治が発起人総代となって、豊橋自動車株式会社の設立を申請した。しかし、政府は交通機関の電気利用を考えていたので受理されなかった。そこで、急遽自動車を電気鉄道

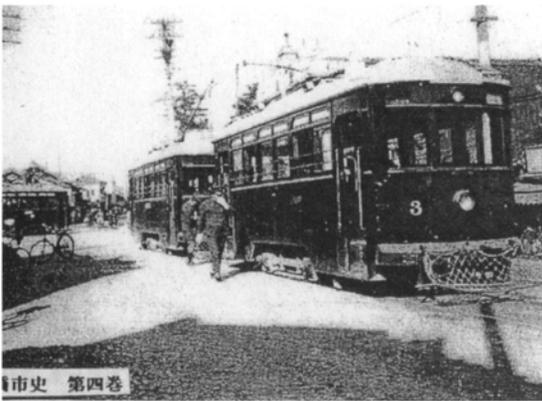


B 東部土地区画整理 現形図



A 東部土地区画整理 確定図

に変更申請して、大正12年に鉄道・内務両省から軌道敷設の許可が出された。折しも不景気と関東大震災の影響もあって資金面で難渋したが、市民の協力を得て同14年7月祇園祭当日駅前―札木―柳生橋間の営業運転を花電車で華々しく開業することができた。札木―東八町赤門前の運転延長に続いて、赤門―東田終点間の工事も完了して、同年12月25日全線開通となった。公害を出さないクリーンな市民の足として豊橋の路面電車は走り続けている。



豊橋電気軌道（現豊橋鉄道市内電車線）

・都市の人口増加と汚水処理の不備は井戸水の汚染をもたらした。上下水道の完備は都市近代化に保健上不可欠な問題であった。

都市計画法適用認可を契機として市営上下水道敷設論が進められた。本市始まって以来の300万円余の大事業は経済不況下のこと起債225万円が認可されて、愈動き出した。昭和2年横田忍助役以下18名で市水道委員会が構成された。水源は調査の結果下川村（現牛川町）西下条三ノ下地先の豊川河底の伏流水を選定した。延10万人を投入した工事も2年9か月後の昭和5年3月第一次工事を完了した。

岩崎と飯村を除く全市域と下地町への給水を開始した。当初は3か月分前納の給水条例が災したが、同14年には給水率が5割を越えた。

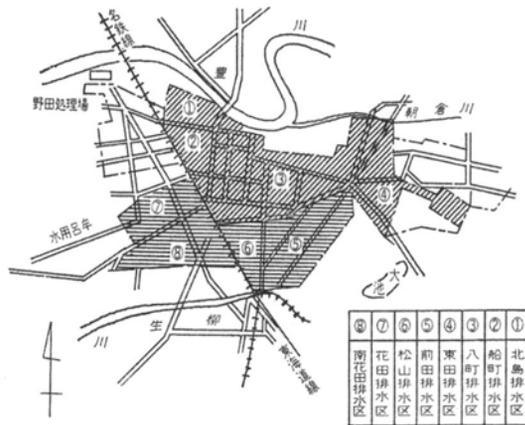
単位：%

市街地	札木	本町	魚町	関屋	港町
	68	65	62	60	70
周辺地	東田	瓦町	三輪	船町	下地
	44	5	7	37	28

[新愛知 昭8.9.12]

上水道の普及状況

一方、遅れていた下水道整備は昭和3年に計画書を作成し、同6年に市会の承認を得て失業救済事業を含めて着工した。下水管の総延長113,732m、排水総面積629ha（東田・八町・前田等7区域）、労働者延79万人余を投入して同10年に完工した。野田処分場の処理方法は促進汚泥法そくしんおでいほうと呼ばれる当時としては最新鋭の設備を誇るものであった。



戦前の排水区（「豊橋市水道50年史」より）

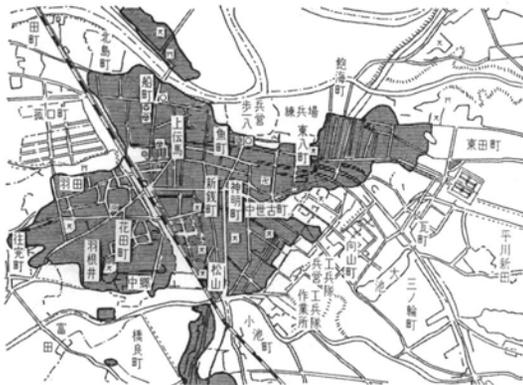
昭和初期～戦後

①戦前・戦中の市民生活

- ・昭和初期頃からこの地域は大部分が住宅地で、市電通りと国道沿いは賑わいを見せていた。町工場や家内工場が点在し、窓越しに作業のようすを見るのは子供の楽しみでもあった。床屋（理髪店）・銭湯（前畑・東新町・東旭町・池見・東雲・瓦町）は地域の人々の交流の場とも憩の場ともなっていた。
- ・公設市場は市が経営する食料品中心のマーケットで、昭和7年に新川と松葉に開かれ

た。市の公認で民間が経営する公認市場は東田（現旭校区市民館前）と花田、続いて高師・八町・小田原にもでき大いに業績をあげた。

- ・大正13年、市農業会により始められた農産物斡旋所が農家不況対策の一環として「市」を各地に設けた。昭和6年三八市（現前畑通）が初めてで、翌7年羽田八幡社境内の一五市と小田原通りの二七市が開かれ、同8年西八町の四九の市（現広小路四丁目に移設）ができた。また、戦後、柱一番町に六十の市が開かれ、旬間二回市内外の農家が生産した疎菜類や日用雑貨類を路上に並べて、市価より安く販売することで庶民に親しまれてきた。
- ・昭和12年の大政翼賛会の組織化、翌年の国家総動員法の公布と政府の権限がジワジワと強化され、国民生活を圧迫していった。米穀管理規制に続いて食糧管理法が施行されて主要食料は配給制となり、衣料も総合切符制が実施された。18年に国民徴用令が改正強化されて12～60歳の男性は徴用工に、15～40歳の女性は挺身隊となって軍需工場へ入った。学校も学徒動員令で兵器生産や食糧増産に従事し、運動場は芋畑となった。こうした中、19年12月と翌1月の二度に巨り大地震（M=8と7.1）に見舞われ、空襲と相まって市民の不安感を一層募らせた。



豊橋市戦災被害図（「豊橋市戦災復興誌」より）

戦局は愈、危機的となり全国主要都市は空襲に曝されていった。豊橋は20年6月19日夜半、B29爆撃機136機の波状攻撃で焼夷弾の雨を浴びせられた。全市戸数の70%が全焼全壊し、死者624人、重軽傷者344人となる悪夢の一夜であった。旭校区では8町内が被災し、焼け出された人々はバラック生活を余儀なくされた。東田国民学校は全焼し、全校児童1,700名中、罹災900名、死亡4名であった。7月から焼け残った神社・お寺・学校（当時は女子商業）・民家の一隅を借りて臨時校舎とし、町別学年別で教具なしの授業を再開した。そして8月15日全国民失意のうちに終戦となった。

②戦後と民主化の波

- ・昭和21年GHQ（連合軍総司令部）の指導で第一次・第二次と農地改革が強力に推進されて、農村の民主化が進められた。大地主制を崩壊させ自作農をふやす改革の目標は同25年3月で完了した。市内の自作農は66.8%→91.6%と大幅に増加し、小作農は27.9%→8.3%と激減して改革は成功した。
- ・市民が闇市にむらがって耐乏生活を送り市政が復興対策に苦慮している時、同21年1



14代市長 横田 忍（前畑町）が第14代市長に就任した。横田忍は最後の官選市長として、戦後の復興、公選市長実現への橋渡し、愛知大学創設などに尽力した。

- ・同22年、民主化の一翼としての地方自治法が制定された。第一回の統一地方選挙と衆議院議員選挙が実施されて民主化への第一

月GHQは軍国主義者の公職追放令を出した。戦争末期に市長となった元陸軍少将水野保も当然公職を追放された。後任には市議会の推薦した県議会議員横田忍

歩をしるした。市長選では県議会議長の
大竹藤知が現市長を破って初代公選市長とな
った。続いて行われた県議会と市議会の議
員選挙では投票率88.5%と驚異的数字を記
録した。市民の参政権に対する自覚と新し
い政治への期待感の表われであった。

- ・学校教育についても、同20年10月から12月
にかけて、GHQから教育改革の指令が
次々と出された。余りにも急激な変化に現
場は混迷した。男女共学・六三制と制度が
先走りして、焼けた校舎の再建もできない
状態で、ましてや中学校の建築など手の着
けようもなかった。そうした中、校舎不足
を仮校舎や間借り教室、二部制授業等で補
い、同23年には中学校10校、小学校22校が
「新教育」の名のもとに、民主教育を模索
しつつスタートさせていった。

付記：青陵中の前身は、昭和22年に発足し
た東部中（工兵隊兵舎他2分教場の旧東
田・岩田校区）と北部第二中（牛川小・
下条小の間借り）であった。学校の統廃
合によって、翌23年10月生徒数1,259名学
級数24の青陵中学校が現在地に誕生した。

- ・昭和23年、詩人丸山薫は豊橋へ帰って、東
田町東前山に住んだ。30年ぶりの感想を、
「帰郷の感」として次のように記していた。



丸山 薫

“30年ぶりの豊橋に帰
って住むと、茜の色が
瞳に沁みて鮮やかだ。
秋末から冬にかけての
さむざむとした晴天の
夕空を染めるあの柿色
の余炎を眺めると、街
は焼けてしまっても索

漠としたバラックの屋根の上に、そぞろに
懐しい少年の日が浮かび上る。
……音便が多くて、少々田舎くさくても、三
河の方言は私の耳には安心して聴ける”と。



【旭小学校屋上より東方を望む】
元旭小学校長 米津一八先生 画

2 校区の活動

(1) 体育活動

校区体育祭は昭和42年（1967）に第1回を
開催し、本年度で40回目を迎えた。競技種目に
レクリエーション的要素を採り入れる等の工
夫を凝らし、参加者の意欲を駆り立てている。
年々老若男女その数を増し、益々盛大になっ
ている。

プチソフトバレーボール大会・ドッチビー
・フットベースボール大会・グラウンドゴル
フ大会等の町内対抗や子ども会の競技会が
開催されている。年間を通じて校区民の体力
づくりとコミュニケーションの拡大を図って
いる。

(2) 市民館活動

平成17年度の校区市民館の利用者は延
29,000人であった。毎日殆ど終日、いろい
ろなサークルやグループが楽しんで学習して
いる。

市民館まつりは、昭和57年から数えて本年
で25回目を迎えた。作品展では、市民館利用
者の学習成果、趣味活動の芸術的作品など出
品点数も年々多くなり、展示方法に工夫をこ
らしている。芸能部門では、多彩な演目が休
憩なしで演じられている。市民館まつり来館
者へのお汁粉接待は名物であったが、数年前
から館外へテントを張り、盛大にバザーを開
いている。校区民のコミュニケーションの場

となって、有意義な催し物となっている。

付記：校区市民館は昭和56年に地域のコミュニティセンター・生涯学習の拠点として小学校の校地内に設置された。それ以来、総代会・各種団体の会議やイベント、集会、研修会を始め多種多様な趣味グループの講座に利用されてきた。利用者数をみると下の表のようになっている。これは市内各館に比しても上位にランクされる。

空調設備も順次整えられ快適に利用されている。災害時の避難所・選挙の投票所ともなり公共施設としての重要性を増してきた。

昭56～	20,150 人
〃 59～	17,400
〃 62～	17,800
平 2～	22,600
〃 5～	27,000
〃 8～	26,900
〃 11～	29,600
〃 14～	27,800

旭校区市民館年間利用者数
(3年毎の平均)

(3) 納涼まつり

夏まつり納涼盆踊り大会は、毎年8月上旬、2晩にわたり、老若男女多数参加して、約2時間賑やかに実施している。休憩時には花火や冷菓子を振舞い好評を博している。

(4) 交通安全運動

交通死亡事故ゼロの日、10、20、30日を始め、春・夏・秋・年末の交通安全市民運動の期間中には、各役員が率先して主要交差点に立って、啓蒙運動に協力している。

(5) 青少年健全育成活動

親子で作る健全育成に関する標語の募集や善行表彰など、校区内パトロールの他にも重点的に事業を展開している。

(6) 防犯活動

隣り近所の付き合いを大切にし、外出時の声かけや施錠の確認など、各自の防犯意識の向上を目指す運動を展開している。

(7) 防災訓練活動

町単独では容易に実施できないので、校区全体を対象にして実施している。

(8) 530運動

町内毎に、年2・3回役員総出で、道路や公園の清掃をし、よい環境づくりを推進している。

付記：この530運動の提唱者は、当旭校区に住んでいた元豊橋山岳会会長の夏目久男氏である。氏は「豊橋自然歩道25年の歩み」の巻頭で次のように述べている。
“自然保護が問われて久しいが、自然の保護も環境の保全も机上で論じても真の観念は湧いてきません。その環境に浸り、そこから学び教えられてこそ真の観念が湧いてくるものです。

(中略) 昭和44年市民自然保護団体が結束し、以後豊橋自然歩道づくりを進めてまいりましたが、整備が進むにつれて利用者も多くなり、同時にゴミの散乱が目立つようになりました。ゴミを簡単に何気なく捨てる習慣を打破すべく、山のモ



夏目久男

ラルとして、『自分のゴミは自分で持ち帰る』ことを呼びかけました。530運動の提唱にもなり、自然環境ばかりでなく、都市生活環境も含めて社会道徳の高揚と環境美化のため、昭和50年全市的官民一

体の530運動推進連絡会の結成へと発展してまいりました。”

この運動の提唱者が旭校区にいたことを改めて心に留め、更なる取り組みを続けたい。

(9) 敬老会・成人式

敬老会は、各町が独自の企画で実施している。成人式は、校区社会教育委員会が主管して、「成人の日」に有意義に挙行されている。会場を小学校・校区市民館からあいトピアに移し、旭小学校児童も祝福に参加している。

付記：成人式の変遷をたどってみると

昭和23年の「国民の祝日に関する法律」の施行にともない、同24年1月15日全国的に成人式が挙行された。(県下では、名古屋・豊橋以外は市町村単位で挙行。)

豊橋市は既に組織化されていた校区社会教育委員会が中心となって、校区単位で行われた。当初は数え年であったが、25年に施行された「年齢に関する法律」により、2回目は12月31日の満年齢で実施された。再改正で1月15日の満年齢を該当者としたが、28年から現行の「学齢」(4月2日～翌年4月1日生)となった。昭和36年市体育館新築を機に、全市の新成人を一堂に集め、市の事業として当日の午後、成人祭の名で行われた。しかし、年々新成人が増加し会場も手狭になり、且つ周辺の校区は交通費の負担増が問題となった。同45年から元に戻って現在のように校区主催の成人式となった。全市的成人式に代わるものとして、同46年から「二十歳のつどい」が行われたが、平成9年で廃止となった。

また、当初から記念植樹用として緑化を兼ねて苗木を配布していたが、これも昭和49年に廃止となった。

(10) 平成18年度旭校区総代会事業計画

月	場 所	主な行事・関係機関団体等
4	旭 小	入学式 参列
	青 陵 中	入学式 参列
	市 民 館	総代会校区史編集イベント実行委員会
	高千穂会館	年度初め団体三役懇話会
	市 民 館	校区史役員部長会議
5	旭 小	青少年健全育成会総会
	市 民 館	町総代会議
	旭 小	こいのぼり運動会参観
6	旭小運動場	グラウンドゴルフ大会
	青 陵 中	青少年健全育成会総会
	市 民 館	町総代団体代表等会議
7	市 公 会 堂	市総代会定期大会
	市民館集合	社明校区一円広報パトロール
	東西指定箇所集合	徒歩非行犯罪等予防パトロール
8	市 民 館	町総代・団体イベント実行委員会
	旭小運動場	100祭イベント夏祭り納涼大会
	市 民 館	町総代団体代表等会議
9	市民館集合	社明校区一円広報パトロール
	旭小運動場	校区体育祭
	青 陵 中	運動会 参観
10	青 陵 中	青少年健全育成講演会
	市 民 館	町総代会団体代表
11	市 民 館	校区市民館まつり
	市 民 館	青陵地区市民館まつり
	旭 小	学芸会 参観
12	市 民 館	町総代会団体代表
	市 民 館	防火講習会 女性防火クラブ
1	あいトピア	成人式
	市 民 館	町総代会
2	旭 小	ひなまつり集会 参観
	市 民 館	町総代会
3	青 陵 中	卒業式 参列
	旭 小	卒業式 参列
	市 民 館	町総代会
	市 民 館	町総代団体代表決算予算会

第3章 教育と文化

1 学校教育

(1) 東田尋常小学校・東田国民学校

現在の前畑町内にある“東田町字西前山144番地”の住宅地は、明治25年9月から昭和20年8月まで学校用地であった。



東田尋常小学校正門 一昭和2年一

①全久院から新校舎へ

明治5年の学制発布により、この地方では全久院の寺子屋をそのまま「田尻学校勸善分校」と称して開校した。以後「仁連木学校」「岩田学校仁連木分校」「豊岡尋常小学校仁連木分校」と学校制度の基礎固めや町村併合などのため、目まぐるしく校名だけ変更になった。児童数の増加もあって、明治25年9月に全久院の禅堂から西前山の新校舎に移った。当時の話として「前山の松の生えた小山の東の方、一段低い所をかき崩して校舎を建てた」「まわりは畑ばかりで、東の方に家が一軒だけあった」「校舎は玄関と教員室、教室が二室の一棟平家建てで、先生4人と生徒は上地・下地・瓦町から1学級30人位だった」と云い残されている。



二階建校舎と奉安殿 一昭和初期一

②市制施行で豊橋市東田尋常小学校へ

明治39年8月の市制施行とともに「豊岡尋常小学校」から「豊橋市東田尋常小学校」と校名が変更になった。児童数・学級数の増加にもなって校地の拡張や校舎の増築が行われた。大正11年には講堂が建ち、昭和2年に墓地を移転して初の二階建校舎と奉安殿造営がなされた。昭和4年には少年野球が明治神宮球場での全国大会に優勝した。

③戦時下の東田国民学校

昭和16年に「国民学校令」が施行され、皇国民錬成を目指して国民学校がスタートした。愈、戦時色を濃くしていった。食料増産・勤労奉仕・空襲警報発令等で授業時数は激減していった。昭和20年6月19日夜の豊橋大空襲で校舎は全焼し、一夜にして灰燼に帰した。

④敗戦の苦難な道

焼跡を整理して、7月11日から焼け残った神社・寺院・幼稚園や民家の一隅を臨時校舎とし町別、学年別に分散授業が開始された。それは終戦をはさんで昭和21年1月まで続けられた。次に女子商業の校舎（現旭小）と旧

工兵隊跡で、またまた分散授業を余儀なくされたが、二学期からは全校児童が工兵隊仮校舎に集結することとなった。昭和22年3月旧工兵隊将校集会室で、国民学校最後の卒業式が挙行された。同年4月より「学校教育法」が施行されて、六・三制の新教育制度が発足し、「豊橋市立東田小学校」となった。東部中（青陵豊岡中の前身）の一部と共に引続き工兵隊仮校舎で授業が行われた。

年度	教員数	学級数	児童数
明治39	5	4	135
42	7	6	220
大正元	10	9	429
14	14	12	707
昭和5	20	18	1,069
10	22	20	1,243
16	28	26	1,658
20	32	30	1,708
26	40	36	2,052

東田小、学校統計の推移（「市勢要覧」より）

⑤旭町の校舎へ そして分離独立

旧工兵隊兵舎を利用した教室は、①採光が悪く薄暗い、②机や椅子は高く児童は足が床に着かない状態、③校区外に位置して通学に片道3km以上の者もあり、低学年には

過酷であった。そこで、昭和23年に旭町の女子商業と工兵隊の東田小が入れかわることとなった。校区内では宅地化・市街化が進み、昭和26年には児童数が2,000人を超える状況となった。翌27年学校規模適正化のために、分割することとなった。即ち、東田小は校区を縮小して旧市立商業学校の跡地へ、木造二階建2棟を新築して移り、旭小が一部八町校区を編入して、現在地で分離独立した。

⑥参考

○豊橋市立高等女学校 明治35年町立高等女学校として、西八町の郡役場跡に開校した。増改築を重ねて急場を凌いでいたが、生徒数の増加から本格的学校整備が求められた。明治39年の市制施行と共に、「豊橋市立高等女学校」と改称され、現旭小学校地に新校舎を建設することが市議会で決定された。

学校用地……田畑宅地69筆 11,870㎡
校舎……木造二階建 延3,540㎡

明治45年、創立10周年記念式典と併せ竣工式が挙行された。大正7年から毎年のように増築が実施された。今も残る中庭の丸池は昭和3年園芸部活動用に造られた。又、校庭の樟の巨木も昔を物語っている。生徒数が1,000人を越え、昭和13年8月向山大池（現東高校）の新築校舎へ移転した。



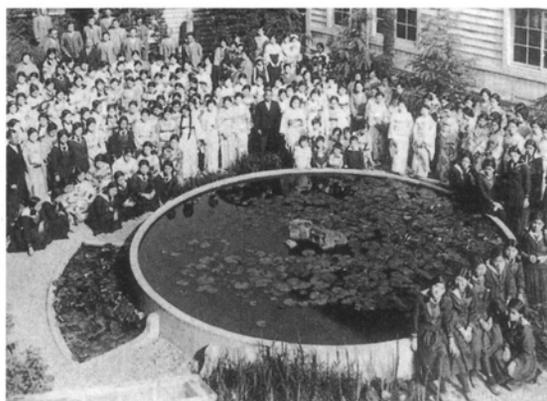
東三新聞 昭和27年3月8日

旭小開校式 旭小提供



市立高女時代鳥瞰図（「アルバムひがし」より）

○豊橋市立女子商業学校 商工業の発展と実業界の若者育成の必要から、実業教育機関設



中庭の丸池

置の要望が強くなった。大正12年、「市立実業補習学校」が西八町の八町高等小学校に併設された。前・後期それぞれ2か年を昼夜二部制で、農業と商業の実業科目を履習させた。大正13年、八町高等が豊橋高等小学校と改称され、舟原町（現中部中）に移転したのでそれに同行した。昭和2年男子は市立商業へ夜間部として移り、女子は商業専修学校として存続した。昭和13年市立女子商業と改称独立し、旭町の高等女学校転出の後へ移転した。

(2) 豊橋市立旭小学校

今年、本校は昭和27年（1952）創立以来55周年を迎える。現在の児童は165名（121世帯）、職員16名、7学級の規模である。今年も「力いっぱい たくましく」を校訓に教育活動を行っている。

これまで、5,561名の卒業生を送り出している。俳優の松平健氏も卒業生の一人である。PTAと地域に支えられ、17代の校長、延べ244名の教職員で学校経営がなされてきた。

①本校のあゆみ

- ・昭和27年（1952）創立 校歌制定
- ・昭和28年（1953）
八町小学校より転入児童の歓迎会
- ・昭和31年（1956）放送教育発表会
児童数1,544名でピークをむかえた。
- ・昭和33年（1958）



向山小学校へ分離。転校児童とのお別れ式

- ・昭和36年（1961）プールが完成した。
- ・昭和38年（1963）鉄筋校舎使用開始
- ・昭和39年（1964）
交通安全教育発表会を行った。
- ・昭和46年（1971）創立20周年
全校舎鉄筋化完成
- ・昭和47年（1972）“教育の森”造成
運動場北西角にイチヨウを植樹した。
- ・昭和49年（1974）体育館完成
- ・昭和50年（1975）
5年生の野外教育活動が始まった。
- ・昭和52年（1977）米飯給食開始
チビッコ山完成（PTA製作）
- ・昭和54年（1979）
理科教育研究発表会を行った。
- ・昭和55年（1980）大型遊具完成
- ・昭和56年（1981）
小鳥小屋を新設した。
創立30周年記念行事を行った。
- ・昭和57年（1982）
こいのぼり集会が始まった。
- ・昭和58年（1983）
ひなまつり集会が始まった。
- ・昭和60年（1985）豊作畑（園）を造成
- ・昭和61年（1986）市制80周年
タイムカプセル埋設
- ・平成2年（1990）

校歌祭出場 校舎大改装工事開始

- ・平成5年(1993) 青陵ブロック小中学校体育祭参加 スクールアート撮影
- ・平成8年(1996) コンピュータ8台設置
- ・平成9年(1997) 木の広場遊具完成
- ・平成10年(1998) プール温水シャワー設置
- ・平成12年(2000) インターホン各教室設置(防犯対策)
- ・平成13年(2001) 創立50周年記念事業 和太鼓クラブ新設 コンピュータ41台設置
- ・平成14年(2002) 校舎南側窓ガラスを強化ガラスに取替
- ・平成16年(2004) 体育館・校舎の耐震工事を行った。
- ・平成17年(2005) 保健室シャワー設置 体育館屋根塗装工事を行った。 図書の出借をコンピュータ化した。
- ・平成18年(2006) タイムカプセル開封式

(3) 藤ノ花女子高等学校

1902年に僅か22名の生徒で開校した家塾的
学校が、100年間で40,000人余の卒業生を送り
出した。今や在校生1,300名を擁し、大学も
併せ持つ学園となった。その沿革をたどる。



創立当時の校舎(「藤ノ花学園写真集」より)

①創立—中八町・東八町時代

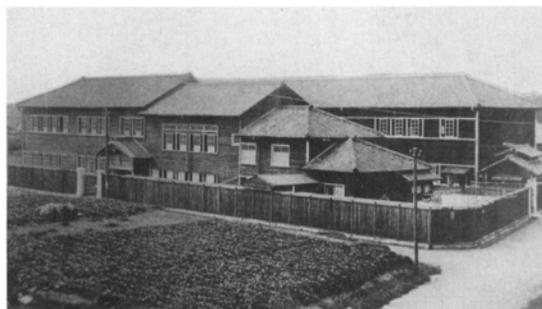
- ・明治35年4月「私立豊橋裁縫女学校」創立。
女子実業教育の先駆者伊藤卯一は県知事
の認可を得て、中八町で創めた。その学
校規則総則に「本校ハ女子ノ淑徳ヲ涵養
シ、裁縫家事ソノ他女子ニ須要ナル実用
ノ知識技芸ヲ授クルヲ以テ目的トス」と。
- ・明治37年4月 東八町へ校舎移転。36年に
85名、37年に116名と生徒数増加により
増築移転し、寄宿舎も設置した。
- ・昭和6年9月「豊橋高等裁縫女学校」と法
令改正に準じて校名を改称した。
第二代校長に伊藤健児氏が就任した。

②充実—旧学制時代(昭7~昭22)

- ・昭和7年9月、老松町
の現在地へ移転、創
立30周年を期して校
舎寄宿舎を新築した。
- ・昭和10年11月「豊橋家
政高等女学校」と実
業学校令改正に準じ
て、校名を改称した。
- ・昭和12年3月“針に感
謝の念を”との願い
をこめて、針霊塔を中庭に建立した。
- ・昭和20年8月 豊川海軍工廠の空襲で生徒
30名、教師1名が爆死した。(慰霊碑を
北校舎中庭に建立する)
- ・昭和21年3月 「藤花高等女学校」と高等
女学校令に則って、校名を改称した。



昭和7年頃 夏服
丸地建郎(池見町)画



昭和7年に現在地(老松町109番地)に移転拡張

昭和9年卒のFさんは「…袂袖の黒い校服と長い袴で、自転車通学でございました。12kmの凹凸道を45分でスッ飛ばしたり、雨降りともなりますと、長い袴を腰の辺で結わえて、まるで弁慶を思わせる姿でございました。でも、皆さんが大変品の好い服装だと言ってくださいと、少しばかり嬉しく、誇りをさえ感じました。」と思い出を語っていた。

また、昭和20年卒のMさんは「…通学不可能だったので、寄宿舎に入れていただきました。馴れない学友ともすぐ親しくなりました。食糧事情が悪かったので、校庭を耕してさつま芋を作ったり、朝倉川の堤防に生えていた筍を採ったり、どんぐりの粉でお団子を作って食べたりしました。荷車を引いて、松葉町まで味噌・醤油の配給を受けに行ったこともありました。…」と、自給自足の寮生活の思い出を語っていた。

③発展—新学制時代（昭和23～現在）

- ・昭和23年4月 「藤ノ花女子高等学校」と新学制施行により校名を改称した。
- ・昭和33年～63年 校地・校舎・特別教室・本館・実習室・グラウンド等教育環境を順次拡充整備していった。
- ・昭和39年 調理師養成の食物科を開設
- ・昭和50年 第三代校長に伊藤昭彦氏が就任
- ・昭和60年 グラウンドに第二体育館竣工
- ・平成2年 第四代校長に伊藤邦彦氏が就任
- ・平成10年 家政科を生活情報科に名称変更
- ・平成18年 体育館を耐震2階建に大改築

④建学の精神を受け継いで

堅実な家庭婦人を育てる、という全人教育が建学の精神で、これを言葉にして「誠を以て勤・儉・譲を行なえ」という校訓になる。今、本校は一昔前のような所謂“良妻賢母”ではなく、女性の権利や責任を身につけた、新時代の女性の育成を目指している。

2 幼児教育

(1) 社会福祉法人豊橋同胞園

豊橋ひまわり保育園

所在地 豊橋市東新町253番地

理事長 井川吉正

園長 山本ひとみ

沿革 昭和17年、出征軍人遺家族の職業補導を目的とする愛知県授産所協会が設立された。同協会主事の井川徳治氏が「豊橋同胞園授産所」を豊橋商工館に開設した。

昭和18年、遺族や母子家庭の増加により、恩賜財団軍人援護会と協同して東新町の現在地に移転し、臨時保育所も併設された。

昭和21年、終戦で閉鎖されていたが、県知事の要請で戦争未亡人・母子家庭を対象に援護事業を再開した。「豊橋同胞園母子寮」と改称し、保育所も設置された。

昭和40年、社会福祉事業に所属して、総合福祉施設となった。

昭和45年、厚生省から社会福祉法人の認可を受け「豊橋同胞園豊橋ひまわり保育園」となった。園舎は、木造の既存建物を順次移築・増改築を重ねて、平成12年までに鉄筋二階建てを完了、現在に至った。

園児定員 150名（内2歳未満30名、2歳以上120名）



昭和25年の風景 正面が園児舎、右奥が母子寮

一般保育の他、特別保育事業も行う。

保育目標 “現在を最もよく生きる”

- 意欲と思いやりを持ち
- 望ましい未来を作り出す力を養う

(2) 豊橋ホサナキリスト協会附属幼稚園 愛 児 舎

所在地 豊橋市住吉町160番地

園 長 野町真理

創 立 昭和41年（1966）愛知県知事認可

教育理念 ○キリスト教主義幼児教育—聖書の『神は全ての人を愛し、神の前では一人ひとりが平等で価値ある存在である』との教えに則り、豊かで優しく、たくましい人格形成をめざす。

○少人数制保育—子どもの個性や状態を尊重するために保育人数を少なくする。

○縦割り保育と自由な遊びの尊重—年長・年少の相互理解を深め、長時間自由遊びの中で、子ども時代にしかできない人格形成をめざす。

募集人員 3年保育、2年保育各10名

(3) 学校法人不動院学園

不 動 院 幼 稚 園

所在地 豊橋市瓦町通り一丁目31番地

園 長 池野英龍

沿 革 昭和27年地域の要望により、「不動院保育園として境内に創立開園

昭和31年

宗教法人不動院幼稚園として認可

昭和53年

新園舎を建築し、学校法人不動院学園不動院幼稚園となる。

教育方針 ○健康安全と親切第一を目標に、基本的な生活習慣に基づく躰を身につけ、豊かな情操を養い、安全な生活ができるようにする。



愛児舎



不動院幼稚園



恵日幼稚園



昭和保育園

○道徳性を養い、遊びの中で個性を伸ばし、
すばらしい才能を引き出すことに努める。

○たくましく生きる力を養う。

園児総数 150名（平成17年度現在）

(4) 学校法人臨済寺学園

恵日幼稚園

所在地 豊橋市東田町西郷144番地

園長 鈴木日出子

沿革

昭和21年「恵日保育園」創立

昭和31年「宗教法人恵日幼稚園」認可

昭和56年「学校法人臨済寺学園恵日幼稚園」

認可

教育方針

“仏教精神に基づく情緒豊かな人格の形成”

- ・思いやり、感謝と合掌のできる子
- ・明るく、健康で、たくましい子
- ・自ら考え工夫する、やる気のある子
- ・辛抱強く、最後までやり遂げる子
- ・友達と仲良く遊べる子

以上のことを念願し、教育している。

園児総数 125名（平成17年度現在）

(5) 社会福祉法人太蓮寺福祉会

昭和保育園

所在地 豊橋市東田町西脇102番地の3

園長 市川順敬

沿革

昭和24年、幼児教育施設設置の要望を受けて、寺の土地が用地として提供された。

昭和27年7月、園舎完成開園した。この間檀信徒や地域の人々による、墓地の整地から園舎資材（旧山口毛織の建屋）の牛車運搬まで、尊い労力奉仕があった。昭和49年、園児増と園舎の老朽化により、鉄筋コンクリート3階建てに大改築した。

保育目標

“明るく・正しく・仲よく”をモットーに
心豊かに、思いやりのある子を育てたい。

園児総数 192名（平成17年度現在）

3 神社・寺院

(1) 東田神明宮（旧郷社）

所在地 豊橋市御園町6番地の16

祭神 天照皇大神

境内社 秋葉社 天王社 御鞆社 英霊社
猿田彦社

縁起

東三河地方は地理的環境に恵まれ、早くから皇大神宮と特別な関係にあった。神宮の御厨や御園は伊勢の南部から存在して、平安時代末期には尾張・三河・遠江まで広く分布するようになった。

社伝によれば、延喜2年（902）^{ちよくしでん}勅旨田飽海莊に神宮領が設けられ、御園職員令による^{こくちのつかさのかみ}国地司正として^{ねぎ}禰宜一人と他に八人の^{さかきやま}供を遣され、^{あまてらすめおみかみ}榊山^{注1}に天照皇大神を奉齋なされた、と記されている。

建久3年（1192）の「二所神宮神主文」によれば、この地方では^{はじかみ}薑御園（東田付近）吉田御園（八町付近）橋良御園（橋良町）がいち早くに設定された、とある。前述のように、神宮を領家として内宮・外宮を本所とする、莊園領有関係が結ばれてい



た。葺御園が外宮領として保護されていたことは、「外宮神領目録」に「六石六斗貢進」と記されていることがこれを示している。

当神明宮は、古くから武将をはじめ庶民の崇敬が篤く、天文22年（1553）には二連木城主戸田丹波守宣光公が社殿を造営寄進した。また、慶長9年（1604）には伊奈備前守忠次公が徳川氏の命を受けて、社領三石の黒印地（租税免除地）を寄進している。当神明宮の社殿は、しばしば造り替えが行われて来たようで、棟札が22枚も尚蔵されている。現在の社殿は大正12年に造営されたもので、

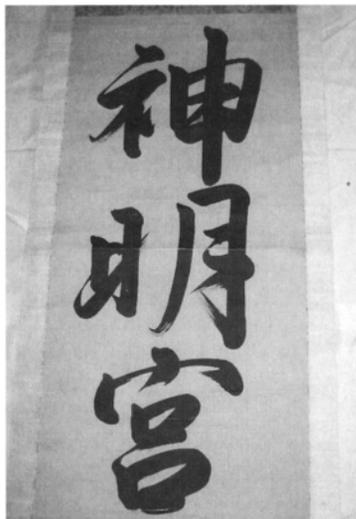
本殿（間口7尺、奥行5尺6寸）
幣殿（間口2間、奥行4間）
拝殿（間口5間、奥行3間半）である。

縁起書によれば、社宝として明治維新の征東大総督有栖川宮熾仁親王の御親筆掛軸三幅と、畏きあたりより下賜された大刀一振が保存されていると、記されている。

当神明宮の氏子区域は、東田校区15町内、旭校区8町内、八町校区2町内と岩田・新川校区各1町内の計27町内である。

特殊神事

〔稚児神楽〕最古の伝承行事、童女が奉仕。



注1：
榊山一榊は古代から栄える木、縁起のよい木として、大変重宝されてきた。栄える木の多い神聖な山を榊山と称えた。三百年、五百年と年代を経た木木の中に、真榊が群生している当神明宮の神域は往古の威風を示している。

〔手筒花火〕古い時代に発祥、年代が不詳。
〔浦安の舞〕紀元2,600年奉祝事業として奉納、現在に至っている。

(2) 瓦町神明社（旧村社）

所在地 豊橋市瓦町字通裏17番地
祭神 天照皇大神 豊受皇大神
境内社 秋葉社 琴平社 津島社 山社
猿田彦社

縁起

17世紀中頃は幕藩体制の確立安定期であって、当吉田藩でも小笠原四代の頃は著しい発展を見せた。往時、東新町から東の方は全くの原野であった。仁連木村の名主佐藤弥八郎等はここを開発して新しい村を作りたいと、再三にわたり藩に願い出たが、寛文4年（1664）この開発計画は許された。東海道往還の両側を開発して、20軒程の居屋敷を造った。こうして瓦町ができると、吉田町やその他の土地からの移住者が多くなり、町が形成された。

翌寛文5年6月土地を現在地に選んで一社を創建した。天照皇大神を勧請して神明社と号し、新しい集落の鎮守とした。「河原町開発覚・享保六年寺社書上帳」には、この時城主より社地として1反2畝歩余を除地（租税免除地）とする旨のお達しがあった、と記されている。

安永4年（1775）の御遷座に際して、更に豊受皇大神を奉斎することとなった。



昭和33年、本殿（木造神明造、銅板葺）を御造営奉り、今日に至っている。

特殊神事

〔粽祭り〕旧暦5月5日に大池の真菰に赤飯を包んで献上する。

〔付〕 河原地蔵尊

瓦町神明社境内の北の一隅、公道の辻に沿って六体のお地蔵様が祀られている。その由来について次のような言い伝えがある。

河原地蔵の由来は、今から800年程むかしの鎌倉時代にさかのぼる。鎌倉と京都とを結ぶ主要道路の一つに鎌倉街道があった。宮路山一本野ヶ原（豊川市の一部）一境川（静岡県境の小川）一橋本（新居町）に至る街道に峯野ヶ原（現豊橋市東部一帯）があった。その一角（現在地から北へ一丁程の所か）に道租神が祀られていた。上り下りの旅人達の道中安全を見守ったり、村人の病気やけがの平癒祈願を受けていた。その頃から靈験あらたかなお地蔵さんとして、多数信者の信仰を集めていた、と言われていた。その後、度々の土地整理などによって転々としたが、昭和の初め頃の東部土地区画整理事業に際して、信仰篤い地元有志の要請で現在地に安置された。

地蔵尊の本願を知り、遠近の人々がそれぞれの念願を抱いて、信仰し続けてきた。本願を成就なされた方々も多数いたようで、ご本尊様の左右に安置されているさまざま



なお地蔵様（馬頭観音像・子安地蔵像など）のお姿からも察せられる。一心に信仰すれば、安らぎの本願も達成されよう、とは世話人の言である。

昭和53年8月24日、野ざらし雨ざらしのお地蔵様が現在のようなお堂に納められた。

(3) 豊城神社（旧村社）

所在地 豊橋市東田町字北蓮田26番地

祭神 源頼政公 松平信綱公

例祭日 4月中旬（頼政公祭5月26日、
信綱公祭3月16日）

由緒

江戸時代の吉田城には、城鎮護のために幾つものお社が勧請されていた。正徳2年松平信祝公が吉田城入封のとき、祖霊社を前任地から吉田城二の丸に移した。信祝公が浜松へ転封のとき、一時その他へ移されたが、寛延3年（1750）その子信復公が吉田城へ入封して、再びこの地に移され幕末まで鎮座していた。

明治4年の廃藩によって、宮下町の秋葉神社に併座された。明治18年同地が陸軍用地となったために、社名を「豊城神社」と改め、中八町89番地（安久美神社境内）に移転したが、再度同30年東八町141番地へ移った。明治45年祭神に松平信綱公を加えることが許可され、文武明智の徳を敬仰することとなった。大正8年4月現在地に奉



遷を完了し、旧藩士^{すうけいしや}を崇敬者として維持して来た。昭和20年の戦災で社殿悉く焼失したが、昭和56年社殿復興計画を作成し、神社庁の承認を得て、昭和60年本殿・宝物庫を造営した。平成7年には伊勢神宮の御神木を賜わり幣殿・拝殿が完成した。

本殿…木造銅板葺流造
幣・拝殿…木造八幡銅板葺流造り) 99㎡

文化財 「覚書留」66冊(市指定文化財)

宝 物 源三位頼政公、松平信綱公の遺品

(4) 桜下稻荷社(旧無格社)

所在地 豊橋市旭町字旭519・520合筆地

祭 神 宇迦之魂命^{うがのみたまのみこと}

境内社 秋葉社 瘡守稻荷社^{かさかみ}

例祭日 例大祭…4月第一日曜日

初午祭…2月

由 来

稻荷社の創建は判然としませんが、古くは吉田城郭内土手町に鎮座され、八幡社の摂社であった。社殿は初め元禄14年(1701)藩士達の手によって造営された。享保11年(1726)には藩主松平信祝公が、文久2年(1862)には家老深井氏が夫々再営して、現在に至っている。総檜づくりの立派なもので、彫刻は目を見張るものがある。

吉田藩最後の藩主松平信古^{のぶひさ}は寺社奉行・大坂城代を経て江戸城溜間詰^{たまりのまづめ}となり、動乱期の幕政の一翼を担い多忙であった。信古は明治2年藩籍を奉還し豊橋藩知事となった。江戸藩邸(下谷中坂町)に祀っていた桜下神社を、明治3年6月旧藩士達の心のより所にと、現在地へ移転鎮祭した。

明治18年、旧吉田城廓内の稻荷社は陸軍用地となったため、現在地へ移転し桜下神社を併座した。大正2年2月神社庁の許可を得て合祀することとなった。

昭和11年覆殿・幣殿・拝殿を造営し、昭

和15年鳥居・水屋を改築して境内を整えた。昭和44年に本殿を、平成8年に拝殿を修復して、現在に至っている。

本殿…神明造(間口3尺、奥行3尺)

拝殿…流れ造(間口2.5間、奥行3.5間)



(5) 道知辺稻荷社(旧無格社)

所在地 豊橋市東田町字北蓮田

祭 神 倉稻魂大神、大国主大神、

須佐之男神、武甕槌大神、

八意思兼大神

[御神体は創建以来順次合祀された]

由 来 この社は、明応元年(1492)に創建された古い謂れを持っている。慶長4年(1599)吉田藩東組(旭町の足軽屋敷)の講中によって再興され、その後幾度か転坐を重ねて、昭和3年現在地へ移された。

明和の頃(1760年代)松平伊豆守信明公^{のぶあきら}が参勤交代の折、二川方面を通行中たまたま濃霧に会い、一寸先も見えず大変難渋した。その時一方の霧が晴れて、忽然とお稲荷様のお社が現れ無事通行できたと言うことである。その稲荷社がこの道知辺稲荷社であった。神恩を感謝して伊豆守は社地として五十石を寄進した。吉田城主も代々篤く信仰し、吉田藩東組崇敬の中心でもあった。霊験あらたかなものが数々あって、祈願すれば失せ物が出てくるとか、「みちびきいなり様」と称して通行の安全祈願とか、

参詣者で賑わった。

東組の弓隊小長、加藤勇左衛門方正は神恩に感謝して、当社に次の額を奉納した。

『……卒ヲ将イテ上場ス座作毫モ遺失スルコト無シ……隊中ノ卒十一試射人十一矢ヲ発ス礼数亦遺失ナシ兩次ノ過チ無キ神助アルニ似タリ……』(現物保存する)

付記：この稲荷社は旭橋の森河家屋敷内で祀られていたが、昭和3年ご本人が東京移転のため、上地町の親戚の手で現在地に移された。



(6) 吉田の秋葉信仰

秋葉信仰というのは、火伏の神としての遠州秋葉三尺坊の信仰のことである。『三州吉田記』には「貞享2年5月遠州秋葉の神輿が通るので、その迎送に不敬なきように、と叫喚した」とある。また「仏閣記」には三河国、牟呂八幡宮の境内に白山社・天王社とならんで秋葉社が、祀られていたことが記されており、元禄6年以前にすでに勧請されていた。

吉田で秋葉信仰が隆盛になったのは、宝暦・明和の頃(1751~1771)からで、各地に代参講組織が生まれた。その要因としては度重なる吉田の大火が考えられる。江戸時代中期以後記録に残されているだけでも、吉田藩と二川宿で一度に20軒以上焼けた大火は24回を数える。殊に宝暦4年(1754)と明和6年(1769)の大火は、町の大半が灰燼と化し、庶民は狼狽の極に達した。そんな時庶民に安ら

ぎを与えたものは、法印であった。『吉田雑記』に「羽田村地内西宿に養宝院という法印あり、此のもの前より秋葉山に月参し、御札を納め、小社を拵えおく」とある。法印による秋葉山への月参・お札納めが庶民の秋葉信仰へのきっかけになっていた。市内に現存する秋葉献燈を見ると、いずれも文化・文政以後の文字が刻みこ

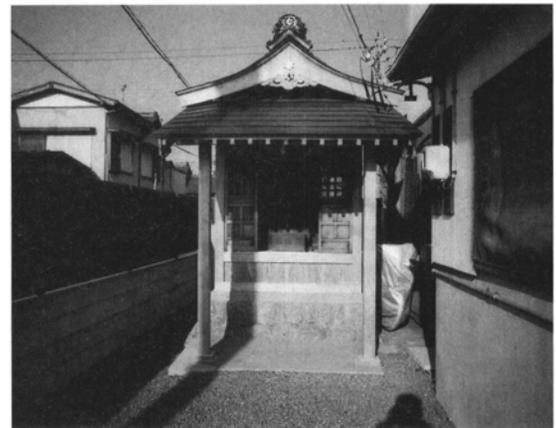


東新町の秋葉献燈

まれている。東新町の秋葉神社の燈籠にも、「文政」の文字をはっきりと読みとることができる。秋葉様を火伏の神として、町とか村とか組で祀っていたのである。

旭校区で現存する町の秋葉神社は東新町・蓮田町・南旭町・前畑町である。その他の町内は氏神様の境内に、摂社として祀られている。

東新町の秋葉神社 当町の秋葉神社の社歴は古く、文政7年(1824)甲申歳6月秋葉山本宮から分神を受けて建立された。爾來今日まで町内の安全と火防守護の守り神として、代々その祭祀が受け継がれてきた。戦前の社殿は、昭和20年の豊橋大空襲で当町の大半が



破壊焼失したのに、唯一つ無疵^{むきず}で戦災を免れた。その靈験は町民の信仰を^{たか}めたことは言うまでもなく、益々祭神祭祀の念を深めたのである。昭和33年東新町公民館再建と同時にその脇に移築されたが、風雪と白蟻被害には耐え難く、平成17年7月改築した。町民の信仰を集めて静かに祀られている。

蓮田町の秋葉神社 国道から桜ヶ丘公園の方へ入る左側石垣の端に、やや奥まって秋葉神社がある。三方住宅に囲まれた社域に、大きな屋根のお社が石積みの上に建てられている。このお社は昭和の初め、町内の総意により木曾ヒノキ材で建てられた。当時、このヒノキ材をめぐる意見のくい違いがあったが、やがて立派にでき上がり町内の安全を見守ってきた。毎年11月の適当な日曜日を選び、神官を招いて御祈禱をあげ、代表者が本山にお参りする丁重な祭祀が行われている。長い年月の流れに老朽化が目立ってきたので、昭和53年秋修復され現在に至っている。



南旭町の秋葉神社 南旭公園内奥に秋葉様のお社がある。戦前は町内の組毎でお祀りしていたが、戦災で焼失したので、昭和27・8年頃にそれを一つにまとめ、町内のお社として現在地に建てられた。

毎年11月1日には、宮司を招いて町内安全の御祈禱をあげ、丁重な祭祀が行われている。特筆すべきは、毎夕町内の人が交代で



お燈明を灯していることである。組の当番が終わると、ローソクとマッチの入った燈明箱を次の組へと廻している。町全体の人々の手で町内安全と火の用心の心が途切れることなく続けられている。これは町民の心が一つに解けあっている行事である。

前畑町の秋葉神社 旭校区市民館の駐車場に並んで、33㎡程の社域をもった、小じんまりしたお社がある。周囲は高さ50cm程に石垣を積んで土盛りをし、切り石で^{こうらん}句欄が^{みかげ}できている。三段の石段を上ると、右手に白御影の「正一位秋葉神社」と刻まれた社標が建っていて、裏面に「昭和十年一月」と記載されている。左右に石燈籠もあるが、文字はどこにも見当たらない。奥中央に高さ1m程の石組みの上に社殿がのっている。石組の裏側に「寄付昭和十年十一月」とあり、下方に「山田龍二」と個人の名が刻まれている。祭祀は町総代を中心に、町民の手で続けられている。



(7) ^{ちくりんざん}竹隣山
^{ほんもんじ}本門寺

所在地 豊橋市前畑町161番地

宗旨 法華宗陣門流 本山三条市本成寺

御本尊 久遠実成の釈迦牟尼佛

沿革 寺伝によれば、元禄8年(1695)3月28日^{にちねんしょうにん}日然上人によって、再興されたとしている。(当山はこの時を開基としている)寺格は平僧格となっている。元は宝飯郡蒲郡町府相城山海岸(現蒲郡市竹島町)に存在して、竹島弁財天社と相對していたために、山号を「竹隣山」と称した。

これより先、文明年代(15世紀末)にこの地方に栄えた法華宗外護の豪族は鶴殿氏の一族であったと思われる。戦国時代も末期になって、鶴殿氏の勢力が失墜していった。当山も同宗の牟呂村本登寺(明治年間に廃寺となった)等と共に一時期荒廢の一途をたどったが、前述のように日然上人によって開基再興され、同宗の長存寺(蒲郡市上本町)の末となった。

大正9年、故あって現在地へ移転し、法華宗総本山本成寺の直末となった。

昭和20年6月の豊橋大空襲の戦火を免れたので、同年7月11日から翌年1月24日まで、全焼した東田国民学校の分散授業のための仮校舎として、本堂や庫裡が使用された。昭和41年、本堂を木造から鉄筋コンク



リート造りに大改築した。昭和56年には納骨堂を新築した。

(8) ^{しょうかくざん}正覚山
^{がんしょうじ}願成寺

所在地 豊橋市東新町28番地

宗派 真宗高田派 本山三重県専修寺

御本尊 阿弥陀如来立像

沿革 当山は、大永2年(1522)2月行円法師によって、関屋町に創建された。天正18年(1590)城主池田輝政公は吉田に入封すると直ちに検地を実施して、経済基盤と戦略拠点の確立を図った。15万2千石の大名の居城にふさわしく、東は旭町から西関屋町に及ぶ広大な縄張りを実現した。同時に城下町の整備も実施した。これによって、当山も指笠町への移転を余儀なくされた。

天明6年(1786)12月29日夜、本町よりの出火で指笠町を含む3か町77軒を焼失する大火で、当山も類焼し全焼してしまった。

当山の寺子屋は安政年間(1850年代)から始められた。寺子屋では書・読を中心に一人の師匠が数十人の筆子を受け持ち、大体4年間の修学年数であった。当山の寺子屋には常時百人余(最高百五十人)の筆子を数え、吉田地方では一番栄えていた。

大正10年、廃寺となった浄土宗善明寺の跡地(現在地)を、拡張し新築移転した。



当山の第13代快雨院暁空諦信師は俳句・南画を能くし、派内寺院には遺墨が多く残されていて、境内には句碑が建てられている。墓所には、豊橋の政治経済の発展に尽力した初代豊橋町長三浦碧水の大形五輪塔の立派な墓がある。

(9) 聖休山任養寺
不動院

所在地 豊橋市瓦町通り一丁目31番地

宗派 高野山真言宗

御本尊 大日大聖不動明王

沿革 寺伝によると、不動院が創建されたのは久寿元年(1154)となっている。即ち平安時代末期、殿上人の麻丸卿は夢枕に、日頃尊崇するお不動様が現われ、「近々この京都が大火事になるであろう。とり急ぎ私を東国吉田の里に移してほしい」とのお告げを受けた。夢から覚めた麻丸卿は、西八条の安阿弥寺に上り、高さ50cm程の御本尊のお不動様(大日大聖不動明王)を背負って東海道を下った。この不動尊像は興教大師覚鑿上人の作と言われている。三河に入った麻丸卿は、飽海の渡しから薑御園のある仁連木村(現東田小の前)に到着した。



不動院山門

ここに小さなお堂を建てて、不動尊を安置した。東田神明宮とともに仁連木の里の鎮護の役を担った。江戸時代に入って、歴代藩主の尊崇を受け藩の祈願所となった。

寛文4年に瓦町開発が行われ、新村の信仰拠点を求める要望がおこり、不動堂を移転することとなった。藩主から敷地の寄進と、山号寺号の免許を受けて、元禄15年(1702)現在地に移った。創建当時の鬼瓦が今も保存されていて、「元禄十五年七月瓦町新兵衛仕之」の刻銘がある。翌16年3月15日から28日まで御本尊の御開帳が行われた。(それ以来60年毎に現在まで続けられている)真言宗高野山松樹院派の中本山の地位を得て、総合的仏教学習の場となって寺が開放された。住職に阿闍梨が就任し、修業僧、養生所、医師、寺侍、寺男等全盛時には27人の陣容をもっていた。

宝暦9年の「寺社間数録」によると、不動院の規模は客殿6間×5間、本堂3間×4間、境内東西27間南北94間と記されている。30石余の寺領を有し、文化元年には津田新田の一部取得の記録が残されている。

主要街道の東海道に沿っていて、いろいろなエピソードが言い伝えられている。慶応4年明治天皇の鳳輦通過の際、藩主大河内信古候が不動院の門前に座をとり、お見送り申し上げた。

明治初期の排仏毀釋の運動によって、一時荒寺となり貴重な寺宝も文献も散逸してしまった。明治末、本山役職の池野英純師が入山して、荒廃した寺を整備復興させた。

豊橋大空襲では、境内に焼夷弾が落下し炎上したが、関係者の懸命な働きで消火した。昭和50年本堂を鉄筋コンクリート造りに改築した。創建当時の面影を残すものは、前述の鬼瓦の他に、山門と樹齢約四百年のヤマモモとマキが境内にある。



元禄2年銘鬼瓦（右）（高岡幸氏蔵）
元禄15年銘鬼瓦（左）（不動院蔵）

(10) 萬年山
臨濟寺

所在地 豊橋市東田町字西郷114番地

宗派 臨濟宗 東福寺派

御本尊 釈迦如来

沿革 正保2年、吉田藩主小笠原忠知公が豊後杵築から移封の際、多年帰依していた宗玄寺を吉田に移した。忠知公の子長矩公は寛文4年（1664）山号・寺号も改め、大本山東福寺240世虎伯大宣禅師を勧請して、現在地に創建した。除地百石を拝領し、広大な寺領を有していた。往古は七堂伽藍完備し、小笠原家菩提寺として勢力を広げた。

明治初期の廃藩置県・排仏毀積の大改革に巻き込まれ、殿堂は破壊され境内は荒廃した。仍て、第16世蓼湛普寂和尚の時、間口8間半奥行7間の本堂と書院を新築して、旧観を再現した。昭和5年高野山弘法大師1100年奉賀出開帳を21日間厳修して、豊橋



臨濟寺山門

第一の霊場と崇められた。昭和20年6月の大空襲では、山門と稲荷堂を残すのみで悉く焼失した。昭和26年に再興史蹟保存会を結成して、庫裡・本堂から順次開山堂・庭園・茶室の復興に着手し現在に至っている。文化財 小笠原家奉納經典（市指定文化財）

歴代城主自筆の經典8点 全9帖
庭園 茶道宗徧流始祖山田宗徧が造った枯山水の庭園。本宮山・石巻山を借景とし、竹辺よりの流水が豊川に注ぐという、雄大な構想の庭園である。

(11) 太子山勝鬘院
太蓮寺

所在地 豊橋市東田町字西脇102番地

宗派 浄土宗 総本山京都知恩院

御本尊 阿弥陀如来

沿革 往古、聖徳太子が駿州へ行幸の時、屏風岩の麓にあった隠者の庵で一夜の宿をおとりになった。太子から仏法不思議の示現を受けた隠者は発心して剃髪した。庵を寺として「太子山勝鬘院太蓮寺」と名付け、自らを勝鬘と称して、太子像を刻んで本尊とした。と伝えている。

寺伝によると、小鷹野の屏風岩の麓にあった真言宗の寺を、文安3年（1446）住持覚阿残夢和尚が現在地に移転し、浄土宗に改宗した。と記されている。

ご本尊の阿弥陀如来座像は像高1尺4寸で室町時代の作である。江戸時代には飽海村や旭町・牛川村の住民が多く参詣に来た。

昭和20年の豊橋大空襲で、本堂や庫裡を焼失したが、昭和42年に鉄筋コンクリート造りで新築落慶し、現在に至っている。

近代的な本堂とは対照的に、左手に本瓦葺きの十王堂がある。これは、享保2年（1717）の建造物で、大正9年瓦町の善明寺廢寺の時、ここに移築した。彩色木造の

十王像が三十三観音と共に安置されている。

寺宝として、祐天上人^{ゆうてんしょうにん}（芝増上寺三十六世）の「南無阿弥陀仏」の掛軸、「十三尊体御絵像」十二幅を所蔵している。



太蓮寺本堂と十王堂

(12) 陸軍墓地

所在地 豊橋市東田町字西前山

沿革と現状 開設以来の記録は臨濟寺に保管されていたが、昭和20年の豊橋大空襲で寺もろとも、焼失してしまった。従って、戦前の部分は豊橋市史により記述する。

明治18年、俗に『臨濟寺山』と呼ばれた旧藩時代の刑場跡に、陸軍墓地は設けられた。

銅板で覆われた二基の碑には、西南戦争時三遠駿豆出身の戦没者氏名が刻まれている。当初、中八町の軍人記念碑横に建てられていたが、明治30年、日清戦争戦病没者の合葬碑二基建立と共に、此所に移転併設された。日露戦争戦病没者の碑は合同碑と将校・准士官・下士官・兵の階級別碑が、一つ垣にまとめられている。敷地の東側、南北二列に日清・日露戦争とそれ以前の個人墓碑が並んでいる。大型の将校碑31基と小型の下士官兵卒碑53基である。その中に異色の墓碑が二基ある。清国の俘虜張四元の墓とキリスト教信者秋山助六郎少佐の墓である。(秋山は日露戦争遼陽総攻撃の決

死隊隊長となり壮烈な死を遂げた。日本メソジスト教会信者らしくアーメンで結ばれた遺書が墓背に刻まれている)。次に第一・第二次北満州派遣時の墓碑が建っている。特に二次の満州事変の碑は、旧満州各地の忠霊塔に似た尖頭角柱碑である。日支事変・太平洋戦争戦没者慰霊碑は昭和39年に歩兵18聯隊ゆかりの有志によって建立された。その他の慰霊碑は戦後戦友会の手で次々と建てられた。

昭和57年の桜ヶ丘公園造成工事によって、墓地敷地は往年の半分以下となり、墓碑は全て東向きに整理縮小された。



4. 人物・民話・昔話

(1) 武田賢治 (1865~1937)



旧住所 豊橋市東田町東前山
出生地 知多郡成岩村
(現半田市)

業績 路面電車をはじめ各種電気業会社の設立に貢献した。

慶応元年、医師荒川吉蔵の二男として生まれ、7歳で父を亡くし、苦学して医師開業試験に合格した。宝飯郡国府町の名家武田準平の養子となり、医業に専念して郡の医師会長を務めた。町会議員・郡会議員・町長・県会議員・県参事会員などを歴任した。

明治40年、豊橋電気KKの増資に参画して重役となりこの道での活躍の始まりとなった。

大正の経済恐慌で苦境に陥ったが、経営の拡大に日夜努力した。名古屋電燈KKとの吸収合併に同意できず辞任退職して、大正10年豊橋電気信託会社を設立した。自ら社長となり専務に今西卓を得て、電力の自給拡大を図った。水量豊富な天竜川系の水力発電開発に目を着け、大正13年水窪発電所（昭和3年開業）の建設に着手した。

賢治は、豊橋が近代都市として発展していくためには、大動脈となる市内交通機関の整備が不可欠だと考えた。当初、自動車鉄道で設立申請したが認められず、急遽電気軌道に変更申請した。大正12年3月免許が下付された。極度の経済不安定状態を克服して、翌年1月社名を豊橋電気軌道株式会社とし、社長武田賢治で発足した。大正14年12月駅前⇄東田間が全線開通した。

賢治は渥美電鉄設立をはじめ、豊橋自動車・豊橋循環バスのほか西遠電気・水窪発電所の各社長等電気電力業界に幅広く活躍した。

晩年は一切の職から退き、東田町の対山荘に隠棲し、昭和12年享年72歳で逝去した。

(2) 今西 卓 (1883~1933)



旧住所 豊橋市東田町東前山
 出生地 岐阜県揖斐郡池田村
 業績 長篠水力発電所建設
 はじめ、鉄道建設の事業家。

今西卓は明治16年岐阜県池田村の代々豪農の家に生まれた。父は漢学や詩歌の素養の深い人であった。卓が極めて教養が高く、厳しさと優しさ兼備の人物であったのも、その家庭環境によるものであろう。大垣中学・第三高等学校・京都帝大電気工学科へと進んだ。卒業後は学者になろうと考えたが、友人の話から就職することに決した。

明治41年大学卒業後豊橋電気株式会社に入社、主任技師となった。同43年鳳来町長篠水

力発電所建設に従事した。東三河の河川は水量こそ豊富だが落差が少なく、従来の横軸発電機では目的を達し得ないと考え、縦軸式発電機を採用した。これが極めて良好な結果を挙げ、同発電所の見学者が続出した。この縦軸式発電機はその後ようやく普及し、我国の電気業界に大きく貢献した。大正4年には同社の支配人に就任したが、同10年会社の合併問題に同意しかねて退職した。直ちに武田賢治と共に豊橋電気信託株式会社を設立した。翌11年に渥美電鉄（現豊鉄渥美線）を設立し、電力自給拡大のために、同13年水窪発電所建設に着手した。安価な電力を安定供給することは卓の信念である。豊橋電気軌道株式会社に続いて、昭和2年三信鉄道（現飯田線）を設立し、三河と信州の物流と電源開発の資材運搬ルートの確保を図った。その他十数社の経営にも参画した。

東田土地区画整理組合設立に際し、発起人代表として地域住民から趣旨賛同を得るために奔走した。陸軍墓地周辺を公園緑地とする昭和初期としては画期的計画も遂行した。

昭和8年政界転身の夢も空しく享年49歳で逝去した。

(3) 伊藤 卯一 (1867~1941)



出身地 渥美郡細谷村
 （現市内細谷町）
 業績 三河地方における女子実業教育機関の創始者。

明治35年、中八町に豊橋裁縫女学校が、伊藤卯一によって創設された。卯一は慶応3年農業伊藤善兵衛の三男として生まれた。小学校を卒業すると農業の傍ら、田原村の川澄親や太田啓太について漢学・英語を学んだ。17歳で教員検定試験に合格し、母校の細谷を始め谷川、小島、若戸、泉の各小学校で教鞭をとった。卯一は郷土の実業家

朝倉仁右衛門の社会への献身的生き方に強い感化を受けた。

明治33年新しい生き方と教育者として再生を求めて上京、帝国教育会中等教員講習所に入った。翌年冬休みに帰省中、県立四中の舎監に委嘱されそのまま豊橋に留まった。その頃豊橋に公立高等女学校設立の動きがあり、且つ小学校の裁縫専修科目廃止を知った卯一は、女子の実業教育機関即ち豊橋裁縫女学校設立を決意した。明治35年県知事に提出した設立申請書の一項目に「経営ノタメノ収入ガ十分デナイ時ハ教師ハ無給ヲ以テ勤務シ以テ之ヲ維持セントス」とある。卯一は並々ならぬ決意で経営維持に臨んだのである。また教育目標を家事家政全般におき、「且ツ婦徳ヲ涵養シ以テ国家ノ良母タル資格ヲ有セシムル」としている。小学校教師時代に見聞した農村家庭の状況から滲み出された実感である。経営困難な時期もあったが、教育環境を順次整え、爾来40年女子実業教育に一生を捧げた。「誠を以て勤儉讓を行え」の校風を作った。尚、卯一は岡田式静座法（田原の岡田虎二郎考案の健康法）実践者、俳人、茶人（南坊流16世家元）として知られている。頌徳碑・句碑が校内に建立されている。昭和16年8月享年74歳で逝去した。

思い出話二題

N.I.

・陸軍墓地のこと

私が歩兵118連隊に入隊したのが、昭和17年2月1日学徒の徴兵延期が取り消され、繰り上げ卒業となる。言うなれば学徒兵の1回生。卒業の日学長主催の送別会が催される。農学40名の同級生誰言うとなく、「10年経ったら再び学園に集まろうぜ、おう！」と氣勢を挙げた。（生き残りは7名だけだった）

入隊の夕食まではお客様、起床ラッパで飛び起き、兵舎前に整列点呼、遅いと『ピン

タ』の洗礼を受ける。帝国陸軍の躰の習わしであった。朝食前に班長を先頭に陸軍墓地まで駆け足が日課。市電の線路伝いに走り、旭橋付近から右に走ると陸軍墓地、その分岐点に立派な石燈籠が立っていた。（今は鈴木眼科医院の前）交代で号令をかけ体操をする。勉強が嫌いで運動ばかりしていた私にとって、駆け足は『勿怪の幸』順番が廻ってきて号令をかけると「おい、なかなかうまいぞ、貴様誰だったかな」と班長に誉められること屢々。

ところで、昔燈籠のあった場所を付近の人に尋ね歩いてみたが、知っている人は皆無、「さあ、どこにあったかなあ、お爺さんなら知っていたのだが」という返事が返ってくる。『明治は遠くなり』という時代もあったが、今や『昭和は遠くなり』と言ってもよいのではないか。陸軍墓地は家から近いので、散歩がてら時々立ち寄っては昔を偲んでいる。サイパン戦で亡くなった戦友の面影が浮ぶ。

若いカップルがベンチで語らうのを見たので「ここには、国のために戦死した方々を祀



常夜燈

った碑が…」と言いかけると、「そんなこと、わし等には関係ないよ」とうそぶかれる。時代の推移につれて人生観が変わるのも、やむを得ないことであろう。故国のため

に征途につき散華した戦友の運命を悲しく思う。

林立鬱蒼とした松林の半分は枯死、生き永らえた梢を松籟じょうじょうと吹き抜け、在りし日の昔を語る。“花も蕾の若桜 五尺の命ひっさげて 国の大事に殉ずるは 我等学

徒の本分ぞ ああ紅の血は燃ゆる”とここにきて静かに口ずさみ往時を偲び感慨に浸る。

・「野原 栄」のこと

氏は、終戦時軍馬一頭を持って復員。軍馬は在隊中世話をしていた関係からのようであった。世相は終戦後日浅く、職のない人々が巷に溢れ、生活は極限の状態であった。そんな時氏は、馬で運送業に携わることを思いついた。時節柄それが当って、次第に財をなし「野原組」を興すのである。言うなれば「立志伝」中の人であったと申し上げたい。無一文から財をなした成功者であり、尚且つ社会に奉仕した功績は誠に大と言うべきである。後年、推されて市議会議員を永年勤め、次は議長と言うところで悲運にも健康を損ね、享年67歳で病歿した。

その間、旭小のPTA会長として児童の交通安全を願い、正門前に歩道橋を建設寄付したり、藤ノ花学園PTA会長を10年の長きに亘り務め、私学教育推進のために多大な功績を残した。更に幼児教育の重要性を考え、多米の山裾に「夢の子幼稚園」を開設した。

「〇〇さんやあ、お金は天下の廻りもの、有益に使うことだ」は氏の口癖であった。馬一頭で財をなし、社会に貢献した功績は氏の慧眼と努力に他ならない。

伝説

仏どろぼう

東田町字西脇102、太蓮寺の本堂右手にある十王堂の中をのぞくと、各約一尺の三十三体の観音像がズラリと並んでいる。今も檀家が毎月集まって信仰する観音像にはこんな言い伝えが残っている。

……むかし、大変信心深い男が「毎日自分の家で観音様を拝みたい」と思っていた。男は太蓮寺の和尚が出かけた夜に、こっそり寺

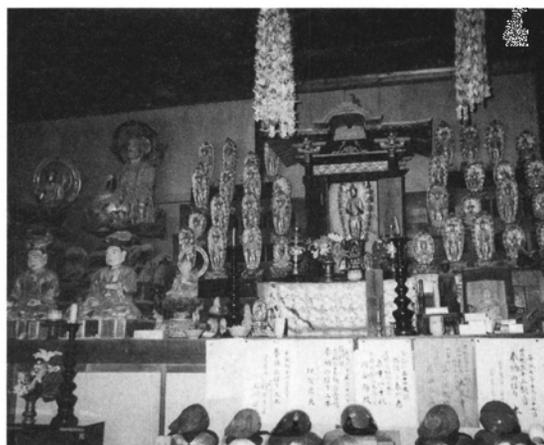
に忍び込んだ。他の坊さんたちが寝ているのを確かめ、お堂から一体の観音像を盗み出した。

男は観音像を背負って家路を急いだ。然し、しばらく歩くと観音像が重くなってきた。男は不思議に思いながら歩き続けていくと、朝倉川に着いた頃には、重くて一步も動けなくなった。「明日の朝早く取りに来よう」と、観音像を橋のたもとに置いて帰った。

しばらくして、一人の農夫が橋のそばを通りかかった。すると、「もしもし、どうか寺まで連れて行って下さい」という声が聞こえてきた。あたりを見回してみると、観音像が横たわっていたので、急いで太蓮寺へ持っていった。

大騒ぎをしていた和尚たちは安心し、橋のたもとで待ち伏せて男を捕まえようと考えた。案の定、男は翌朝早くに現れ、すぐに捕まった。男は素直に謝り和尚に許され毎朝寺に来て観音様を拝むようになったと言う。

(平成10年中日新聞東三河版「古里点描」54より)



太蓮寺十王堂の三十三観音像

瓦町の梅屋敷物語

戦前、瓦町に梅屋敷と呼ばれた家がありました。大きな邸宅で庭も広く、多くの梅が植えられていたので、誰言うとなく「梅屋敷」と呼ばれていました。でも、庭内に漂う無気

味で陰惨な空気は、何も知らない者にすら肌寒い思いを与えずにはおきませんでした。

昔、この家に老母と息子夫婦が住んでいました。息子の嫁は気性が激しく、その上我儘だったので、常に老母に強く当っていました。それにひきかえ、老母は昔風の穏やかな性格だったので、抵抗することもなく我慢していました。夫たる息子が妻女を戒めるべきだったのに、母に似てあまりにも温和すぎました。

姑いじめは当時としては珍しいことで、気の強い怖るべき妻女は遂に老母に腕力を加えるようになりました。耐えかねた老母は息子の不甲斐なさや嫁の暴挙を憎んで、ある夜意を決して庭内の鈎瓶井戸に投身自殺しました。それ以来、毎夜丑三ツ時になると静寂の庭に、鈎瓶のカラカラと回る不気味な音が鳴り出しました。気丈な妻女も思わずゾーッと鳥肌が立ち、はじめて我が身の不心得を知ったのでした。併しその時は既に遅く、ある夜老母の死んだ同時刻に半狂乱となって、同じ井戸に飛び込み断末魔の悲鳴を残して死んでしまいました。間もなく息子も物に憑かれたように、この井戸に身を投げてしまいました。それ以来この梅屋敷に住む人もなく、深夜になるとカラカラと鈎瓶の音だけがしていたと言います。

その後この家に住む人が二～三ありましたが、いずれも病人を出したり、鈎瓶の音にうなされて、永くは続かなかったそうです。

昭和20年6月の豊橋大空襲で、このお化け屋敷もきれいに焼かれてしまいました。
〔豊田珍比古の“おらが伝説をさぐる”より〕

お弓橋

その橋は御園町と牛川薬師町との町境の朝倉川に架っている。幹線道路から離れ、周囲はごく普通の静かな住宅街、商店は一軒もなく人通りも少ない。長さ36m、幅6mの何の

変哲もない橋に、こんな悲しい言伝えがある。

江戸時代、牛川村（現牛川町）にお弓という名の美しい豪農の娘がいた。瓦町に住む義太夫師匠の京右衛門を招いて習い事をしていくうちに、二人はいつしか愛し合うようになった。お弓は男が通いやすいようにと、下男に命じて朝倉川に橋を架けさせた。

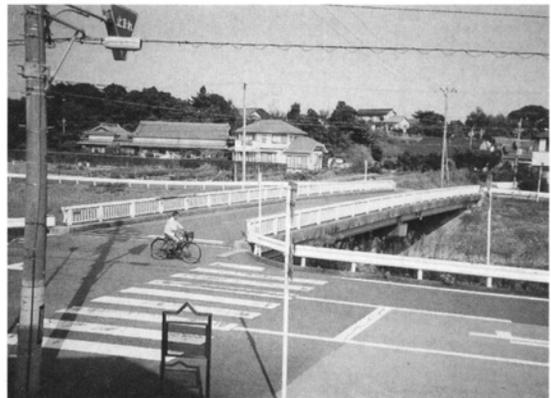
お弓の父親は、京右衛門の出入りを禁じ、お弓には監視を付けた。お弓は世をはかなんで自宅の井戸に身を投じてしまった。同じころ、前夜の大雨で水かさを増した朝倉川下流で京右衛門が水死しているのが見つかった。

それから、瓦町からきつね火一つが橋を渡って牛川村に通い、帰りには二つのきつね火が橋まで来て別れるようになった。お弓の父親は気味悪がって橋を壊した。すると、川の兩岸できつね火が一つずつ狂い飛ぶようになった。新しい橋を造って供養塚をつくると、現れなくなったという。

お弓橋は、昭和10年頃に区画整理で、やや下流に移転された。41年に豪雨で壊れ、二年後に再び建設。昔ながらの木造で、伝説当時の面影をしのばせたが、53年に鉄筋コンクリート製に改築。これが現在のお弓橋である。

東田町西脇の太蓮寺住職は「伝説じゃなく実際にあった話です」と言う。寺の墓地にはお弓の墓がある。

（平成9年中日新聞東三河版「古里点描」27より）



現在のお弓橋

参 考 文 献

豊橋市史1～4巻 とよはしの歴史 豊橋の史跡と文化財Ⅰ～Ⅲ 豊橋市神社誌 豊橋寺院誌 ふるさと豊橋Ⅰ・Ⅱ	豊橋市編集委員会 豊橋市 豊橋市教育委員会 愛知県神社庁豊橋支部 豊橋市仏教会 豊橋市校区社会教育委員会連絡協議会 豊橋市教育委員会 同編集委員会・市水道局 同編集委員会 豊橋整地協会	530運動20周年記念誌 とよはし地学めぐり 忘れえぬ蚕都豊橋 校史ひがし豊橋東高90年史 晨（百年のあゆみ） 創立100周年記念写真集 とよおか誌 おらが伝説をさぐる わが人生街道 国史上より見たる豊橋地方	530運動推進委員会 豊橋地学同好会 橋山徳一 創立90周年記念事業実行委員会 東田小学校創立百年実行委員会 藤ノ花学園 豊橋市立豊岡中学校 豊田珍比古 村田誠一 大口喜六
---	---	---	---

編 集 後 記

校区総代会が中心となって「校区史」を編集することになって、聊か戸惑いを感じました。それは、素人で校区の歴史を明らかにすることができるだろうか、皆無に等しい資料の中でどこまで信頼される校区史になるだろうか、ということでした。

旭校区は、元々東田校区・八町校区から分離独立した校区ですから、時代的変遷や歴史的背景は共有しています。そこで、立派な「豊橋市史」を拠り所として、この地域に係わる事柄を拾い上げて検討することとなりました。自然編や文教編はともかく、中世以前の歴史編については参考文献等を頼りにまとめました。門外漢で不馴れな編集委員ですが、手探りでやっとここまで辿り着きました。史実の採上げ方、記述の仕方等校区の皆様方にご満足いただけるかと危惧致しておりますが、郷土理解の一助になれば幸いです。

原稿取材にご協力を賜りました方々に、末筆ながら厚く御礼申し上げます。

(旭校区史編集委員一同)

旭校区史編集委員

編集委員

溝口 和政 (前 畑)	原田 一二 (老松二)	山本 薫 (坂 上)
赤川 進 (旭 小)	谷中 允男 (南旭一)	塩野 康夫 (池 見)
大羽 和雄 (坂 上)	鈴木 徹 (南旭二)	服部 享 (老松一)
加藤 孝典 (東新町)	高野 裕賢 (東 旭)	林 一郎 (住吉一)
小柳津栄治 (蓮 田)	服部 正司 (住吉二)	村田 秀次 (蓮 田)
白井 俊明 (住吉一)	花井 每恵 (老松一)	石黒 信夫 (池 見)
梅村 豊 (前 畑)	石黒 拓夫 (サポーター)	高橋 伸治 (サポーター)

協力者等 (順不同敬称略)

伊藤 昭彦	福沢 秀倫	高谷 昌広	都築 英信	今泉 英文	三浦 光幸
亀山 琢道	池野 英竜	市川 修敬	森川 昌芳	山本ひとみ	丸地 建郎

校区のあゆみ 旭

平成18年12月25日発行

編 集 旭校区総代会
旭校区史編集委員会

発 行 豊橋市総代会

印 刷 株式会社 きょうせい

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています

PRINTED WITH
SOY INK
Trademark of American Soybean Association



2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyokashi City

つながり ひろがる 未来 豊橋